小槙舍雜録

甲

15
1909
1

15
1909
1

<2016-11>

鶴峯戊申述

堤中納言物語 虫めづる姫君云 まだかなハ書きゐハざれバかたかなに云々

狭衣物語ニ云 歌ヲ片假字（カナ）ニテ書キシ

（東作テ 明ノ代ニ成レ於テ三百年バカリ以前ノモノニ）
閩書呂宋ノ條云 南和北虜皆有文字 類鳥跡古篆ノ案其ノ初

有ニ達人ニ制之耶
（東條云 唐代ニシテ今ヨリ千年以前ノモノニ）

續博物志云 倭辰ノ宋国或横ニ書或左書或結縄或鍥木
（辰韓ナルベシ 任那カ）

中山傳信録ニ云 元ノ陶宗儀

神代口訣云 神代文字ハ象形也

津嶋紀事統體ニ云按本朝有卜始于壹岐島根見命灼鹿肩骨

以卜上此告ニ太占ト

後漢書倭伝ニ云灼骨以卜用決吉凶

魏志倭人伝ニ云其俗挙事行来有所云為輙灼骨而卜

以占吉凶先告所卜其辞如令亀法視火坼占兆

神代諺解ニ云神代文字ハ卑ニ譜ノ始メ聲ノ上下スルニ従ヒテ

字再上下スル事アリ灼亀ノ兆五ニ割ニ云ニ此灼ル形ノ曲折ニ従ヒ

テ一萬余ノ文字出来ルナリ神代文字一万五千三百七十九字

或ハ三百六十字有之

中古ハ彦昇卜部ノ兼倶ニ至テ本宗ノ神代文字雖秘伝而以下[illegible]

随筆按ニ云ふまんふのもことゝもおどろえものハおどけなき

文字ぞまじるめれとて

此まんふハ磐斎字にても磨崖より出る用ともかなのとしも

神中抄師時卿ノ説ニ云ノ おもひね祭のまにらをすつなれめ

あひよりとせずぞられしき

燕北新記ニ云契丹行軍不擇日用艾和馬糞於白

羊ノ琵琶骨上ニ炙炙破ハ便出不破即不出

延喜式神名帳ニ遠江国佐野郡己等乃麻知神社神名帳

頭註ニ云己等乃麻知大臣貴命也一宮記ニ云称事任ノ神ト猿田

彦ノ命

古今一

みちのくのしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそそ

此歌伊勢物語にも出中には其物語新歌にもあらず
しのぶもぢずりあれるにしかると侍しきこれは古説は陸奥の信夫
文字摺してのぎゆゑを文字摺と申ていふ事なるにあまりにあれもぢり
摺ことを説あしとぞそれは今案には大元年暦を大名持と申
れお如く歴面を麻糸とせし麻糸より紡じて年糸をも糸る
の中にれも文字の字ゆゑにこれは陸奥などもたれし古説の貴り
れる文字にてありを毛糸なるも中にハ不字音の毛年意と誤勢の似
たれすゆに行文字にしてみと承友へ疑惑を起こしれい貴遠感し
業にをはなれてもちずりのちは濡らに清をしてしなべくは

明治十一年三月　落合直澄

落合氏圖書記

○延喜式首巻年数

歴運記 今名公卿記

天皇五十二代 起神武天皇元年至今上弘仁二年一千四百七十年

案本紀等諸書昔者天津彦火瓊々杵尊初従降始西土次彦火々出見尊次彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊惣三代経一百七十九万二千四百七十餘歳並特世邈遠事迹神異具于舊記更不煩述 云云

○弘仁式年数

歴運

天皇五十二代　起神武天皇元年　今上弘仁二年一千四百七十年也

男帝四十三　女帝八　皇后一

案在昔天津彦火瓊々杵尊初従降始至西土次彦火々出見尊次彦波　武鸕鷀草葺不合尊凡三代經一百七十九万二千四百七十餘歳於世邈遠事跡神異云云

○神皇大道本紀　上下二巻　上木

序　延寳六年　戊午六月上旬
南陽熊住仁木祐之進将恒序
下巻終　校並光成撰トアリ

南陽熊ハ紀州熊野ナルベシ
神道家ト見エタリ論拠シ

旧記曰渾沌乃首発開天地則顕在日月而照徹隠闇無明六合乎穩息之賜故先天經八百万歳而大海乃底津仁凝天生土地其性則彰於伊弉諾尊伊弉冉尊而國於化堅給則滄海割天大八嶋乃國始至海上仁出来須云云

○神皇實録　全　上木

巻尾ニ　于時弘仁乙未右大臣従二位兼行皇太子傳勲五等藤原朝臣園人

國常立尊

謂大易者虚無也因動為有之初故曰太初有氣為形之始故曰太始氣形相分生天地人也大方道德者虚無之神也天地没而道常在矣原性命受化於心心受之於意意受之精精受之神形体消而神不毀性命既而神不終形体易而神不変性命化而神常然因以名國常立尊以初為常義者也

天八下靈神　天三下靈神　天合靈神　天八百日靈神

天八十萬靈神

件五柱神則受天地之精氣而氣形質具而未相離名称五大魂是中府藏坐神也故謂神者生之本形者生之具也古語謂称獨化神也

○伊弉諾尊 天降陽神名日孫也 亦称大自在天子 妹伊弉再尊 天降陰神名月子也 亦称大自在天子

○授八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物永為天璽矛玉自從矣

惟皇祖天御中主神與大日靈貴尊盟宣久天皇孫尊知八坂瓊之勾以曲妙治天下且如白銅鏡以分明看行山川海原乃提此靈平天下矣

○御膳神 皇國祖神大御食都姫神世名保食神是也神語供神物名曰由加物也 亦雜器賛同為由加物也故神語名御食津神由賀神其此縁也

八神殿八神ノ注ニ

○件八神則八洲守護驗神八齋靈命八心齊神因以合大象是生化靈明也國家福田也故式為皇帝鎮御魂崇祭矣依神祇官請奏諸司輸祭料宮主御巫供奉御食料稲二束其日御巫於神祇官齋院春稲以麁筥炊以韓竈畢即盛御飯納櫃居案神部二人執向齋所供之于時加大直日神一坐也天種子命招魂續魄祓除不祥也

○造酒司坐神 黒御酒白御酒腹作満奉饗食也

酒彌豆男神 黒御酒作神　酒弥豆女神 白御酒作神

件二神根倉神子也 大年神苗裔大土祖孫也

○皇孫命尊ハ筑紫日向高千穗槵觸之峰天降座以降迄至于彦激武鸕鷀草葺不合尊終年癸丑二主治百七十九萬二

千四百七十六歳

○神道集

神佛集合ノ書ナリ 今文和三年甲午年ノ語アルヲ以テ見レハ其頃僧ノ作リシモノト見エ

○神皇正統紀

州八はあまたたび天御虚空豊秋津根別と云神を生たまひし
是を大日本豊秋津洲と名つくこれ
四才 又此国を秋津洲と云ふ神武天皇国の形をめくらし見給ひて
蜻蛉の臀呫のことくあるかなと宣ひしより名つけたるなりと神
代に豊秋津根と云名あれは神武にはしめさるにや

○長寛勘文 全

勘申

甲斐守藤原朝臣忠重并目代右馬允中原清弘在庁官人
三枝守政等罪名事

云云甲斐守藤原朝臣忠重為国司作知行鳥羽院庁御下文為
令停廃熊野領八代庄令目代并在庁郎従等令損亡庄民奪
取資財物掠取神人割其口畢者既盗大社神御物可中流之
上不敬詔命無人臣之礼加之太上天皇与正常無別庁御宣
異詔勅哉其罪可處絞刑又強盗若干財物贓過十五端

之可絞刑、隨從者共ニ犯強盜ヲ、罪無首從早任セ律文ニ可同罪
欤、但忠重身帯ニ五位、雖可請減、犯ハ强盜之無減贖之法
絞形之条更以無疑、仍勘申ス

長寛元年四月七日

從五位上守大判事兼行明法博士備權介中原朝臣業倫

日本書紀ニ云天地之中生一物状如葦牙便化為神号國常立尊次
國狹土尊次豊斟渟尊凡三神矣次有神泥土煮尊沙
土煮尊次有神大戸之道尊大苫辺尊次有神面足尊惶根
尊次神伊弉諾尊伊弉冊尊　句略

熊野大神ト天照大神ト同神ナルヤ否ヲ勘申　若シ天照大神ト同神ナレハ
大社ノ寳物ヲ盗ミ犯シテ罪重クナルナリ故ニ古書ヲ徴シテ諸士勘アリ
其中熊野權現御垂跡縁起ヲ引ケリ　往昔唐乃天台山乃王子信
ト云物ノ渡リシナリト云ヘリイトト妄リナルモノナリ　僧ノ作ト見ユ

初天地本紀曰伊謝那支命耍惠乃女命ニ生兒大夜乃女命次足
夜乃女命ニ三神云是
奈豆流時成出来神名加已川比古命ト又右肩忍奈豆流時
成出来神名熊野大御神加夫里支名久々弥居奴心命白髪
中成出来神名須佐乃乎命三柱大王等是也此時金國
之八熊野之波比降ニ来伊豆國ニ致熊野村宮柱太知奉ニ

（頭注）
椊惠乃女ハ伊弉冉命ノ亦名
夜ヨルト訓ム
日
大書女　若書女
忍ホシカレ
ノ名ニ對シタル名ナルベシ

（傍注）
類本　次若夜女命
此大夜女命ハ熊野大御神ニ坐ス
生　類本
鬢　類本
金食カ
又金銀国ヲ
新羅ヲ云カ
不審
到カ

而加夫里支熊野大御神地祇神皇又御兒后名ニ大夜女命ト
山狹村宮柱太知奉而静坐スツ大御神ト云フ是也

○出爪　記序

爪　二宮氏云　爫　略字　奚同合

○東奥紀行　序
寛政三年十一月　赤水　常陸人　長久保氏　著

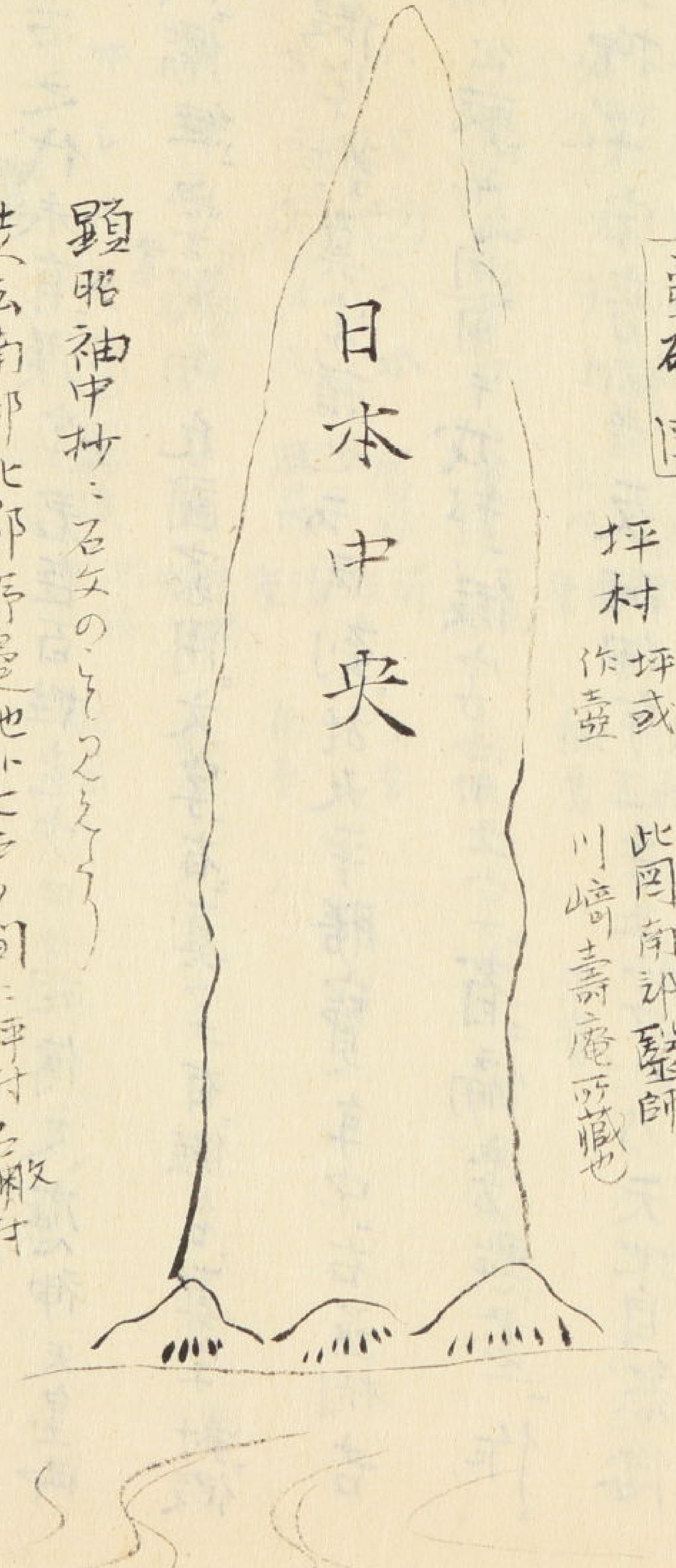
去京一千五百里　去蝦夷国界一百廿里　去常陸国界四百十二里
去下野国界二百七十四里　去靺鞨国界三千里
多賀城ハ大野朝臣東人之所置也神亀元年　○天平宝字六年十二月一日
碑ハ藤原恵美朝臣朝獦修造也

按多賀城碑文曰去常陸国界四百十二里去下野国界二百七十四里常陸界勿来関下野界白川関各去多賀城道程稍相似而碑所記里程数之差殆倍矣可疑之甚也或考歌枕名寄ニ引ニ

万葉歌ニ云常陸本陸奥之八ヵ国也然則天平之時常陸奥之界今那珂ノ湊也以六町為一里則去多賀城四百十二里此時ノ仲ノ名。高。三縣猶屬ノ州可知矣後世或謂之奥郡亦此之由乎

歌枕名寄　和泉式部
法いりもまとのうらやいこそのくのこころつくしの壺の石ふみ

壺碑図



坪村　坪或作壺
此図南部藍師川嵜壽庵所蔵也

顕昭袖中抄ニ石文のこと見えたり
古人云南部北郡野邉地ト七戸ノ間ニ坪村石文村坪川有リ昔文ハ坪川ノ岸ニ在シカイツノ頃ニカ百ケニ山中ヘ引テ埋テ其上ニ祠ヲ立テ石文明神ト崇タリ

○倭片假名反切義解 加序 全 群書類聚 四百九十五

風聞大古之代未有漢字君臣百姓老少口々相傳及應神天皇御世始渡儒經書與漢文而凡國家用文字有真字有假名真字對假字正也假字對真字權也云云到於天平勝寶年中右丞相吉備真備公取所用千我邦假字四十五字省偏旁點畫作片假字抑四十字音響反阿伊宇江乎五字此乃天地自然倭語焉是故竪列五字横列十字加入同音五字為五十字云云

假字反切音義

横

空無有虚示 響出歴吹調			
アイウエヲ	喉開	輕清	宮音
ワイウエオ	喉閉	重濁	宮音
ヤイユエヨ	半喉	不開不閉	変宮
ナニヌ子ノ	舌末	輕清	徴音
タチツテト	舌本	重濁	徴音
ラリルレロ	半舌	不進不退	変徴
ハヒフヘホ	唇外	濁輕々	角音
マミムメモ	唇内	重清	角音
カキクケコ	牙前	清濁輕	商音
サシスセソ	歯後	濁清重	羽音

圏内 正音

竪

花山耕雲散人明魏愚草

仲春日

右一巻搜求舊庫及故中両手録以帰庵倩見聞秘密之奥蔵示權實之正軌然音義軽重清濁猶未盡曉而有益于後学卯木ヶ鳴呼惜哉未知耕雲散人明魏為何世人而已

元和庚申歳東則下弦　阿闍梨良正

右一冊於難波速川氏家許借之余筆染紙彼花山耕雲散人明魏者耕雲自作之和歌呈傳則應永年中出家住山州花山頃焉續作者部類巻下曰凡僧明魏花山院流尹大納言師賢孫權中納言家賢卿子長親南朝仕權大納言新續古今集和歌六首亦親葉集載右大将長親詠歌首数纏首盖長親慕君至孝長歌慣音於我朝遭親喪凡三年居憂者唯遠世自觀中紀夏井也近代正平年中藤長親耳長親入道明魏匪直也人者也

于時正徳三癸巳歳孟春三八日　以寧属今出河如雞

○神別記

この書一冊あるありとゝもしらぬものあり
十冊あるものあり林崎神庫中のこの出の作よ
此書臼井帯刀門才村瀬彦兵衛偽作や

伯家部類ヲ率スル白川家学頭ニ臼井帯刀ト云人アリ此人ナルベシ宝暦年間ニハ神殿再奥ノコアリ其時ノ祝詞ニ見エタリ

とあり日刊帯刀とあるは何れの人なるやうくいふべき何れ
よりやまあらることなるべし

伊賦屋坂

佐々木氏云イブヤハウブヤナルベシ イロコ ウロコ イモ ウモ等通音
同例此類 千五百産屋立テナムノ語アリ 佐々木瑞城

埋木地中ヨリ出

伊豆国田方郡筏場村天城(アマギ)山ノ麓ナル山百年程前ニ崩レテアリ数十丈ノ杉ノ埋木現出ス衆人ユ尻シコラレシテ切ルコニ週ニ及トイヘドモ遂ニ之ヲ残ラズ取ルコヲ得ズト云 青山直虎話

万葉難歌

莫囂圓隣之大相土兄氏湯氣吾瀬子之射立為兼五可新何本

(ユフツキノソラトメテユケワガセコガイタヽセリケムイツカシガモト)

考 荷田大人説 キノクニノヤマコエテユケ 本居大人カマヤマノシモキエテユムイ
此二説未ダ尽ニサザルガ如ル キノクニトヨムモさくじりすぎたり 大相をヤマとよむも穏ならず 又莫囂をカマとよむも囂ノ字のしおいなるし されど莫字ありてハしかよしなどし 國隣をヤマとよむも穏ならず 莫囂圓隣を古訓にユフヅキとあり 夕方ハ静なるものなれバ莫囂をユフとハよめるなるべし 圓隣ハ圓輪と通ず 故ツキとよめるなるべし 大相ハ字ニ大象と同く ソラとよむべし
佩文韻府天文志ニ渾元可任数而測ニ大象可運算而闚 ○陸機嘉賦ニ寄セ沖氣于大象ニ解心累于世羅などあるにて大象をソラとよむべきことをしるべし 圓輪の縁に因て大象を大相に易へたるなるべし 指月録ニ尖時圓相隠圓時尖相在りなど圓相の

字ハ月ニ縁あれハなり
土兒 一本吉兒 七兒 土皃などに作れり 宴ハ土皃の字を写誤れる
なるへし
五十都屓 かおハこねて月のすきぬよなれハ來月の空を謝て
歩みまれ 吉更 いつの櫃の如に星を止めて月を見たまふ
がゝよいもあゆあそしも 夕月の空を認て数たゆんとのことなるべし

菊

菊をキクと云ハ字音と和語と暗合せしものにて装束のキクトヂ
とゆもクヽリトヂの義なり 菊の花ハ装束の口を括りたるが如き故に
キクとハ云なり 高橋彦四郎の説なり まことにさることなるへし 伊勢（宇治なる）にて蓮
花草 これハ室のスミレなるよし 景樹の説なり をくくり花と云へり 此花も菊に似て

括りよせたる如き状なれハなり キクをククと云こと日本紀 菊理媛（ククリヒメ）
とあるにてしるへし これも伊弉諾伊弉冉二神争の縁（ユカリ）をつけ
たる説なり
醫心方 菊花 和名加波良於波岐又岐久
洋学者 窒素酸素説 姫路藩會水侯 山田賤夫物説
伊弉諾伊弉冉二神争れたまふ時千人縊殺さん千五百
産屋たてんとあるハ空気に理に叶へりそれ活物ハ酸素
一割五分に窒素一割相合て生を保つものなれハなり
人も禽獣魚虫も皆この割のなりとかゝれたる実理に
ちかつのなる 和学者 ころおろかなれ

じもの

首書直見云じものハ似ものなり 仁と自とハ通音なり
支那字ニある人仁の如き漢音也ニ呉音ニシなり 鹿自物ハ
鹿ニ似て居る物の義なり しゝいもしゝじの轉音也

常磐 堅磐

直亮云トキハカキハハ床磐垣磐の義なるべし 堅ヲカキと
いふをおもへばこゝにハけはしきことをいふなるべし 万葉一ニ磐床
草川之氷凝なども あり 古ヘ石ヲ以テ垣トシ室トシタルヿ多ケレハ
堅固ナル例ニハトキハカキハトハ云なるべし

阿摩比

二宮嚴橿曰 紀の古本熱田本等ともに有如磐石云云 如木花云云
と如の字をアマヒと訓ところをおもへばアマヒてふ言ハ如の字義
なるべし 古事記ニハ雖雪零風吹恒如石而云云 如木花之
栄栄坐云云 木花之阿摩比能微坐とありと云

註ノ如石如木花之栄ノ如モアマヒとよむべし

直澄案ニアマヒハ形容の義なるべし

○

奥儀抄 ものゝふの神ハうふの神之産霊と書りと云

姥捨山

姥捨山のことにつきて俗語あれと（老婆を山に棄ると云）ともあるならじ或人曰麻葉捨山にて古此処に麻葉を捨しより此名ありともいへり さここえぬとし梅に常陸風土記の歌に許智多鶏波手波頭勢夜麻能いもをさりしみてこらあむふこひそつとさむ 万葉集にもしあり 小泊瀬山乃石城もこもらばともにおもひてのせと云 匹小山田與清云小初瀬ハ古ノ陵墓の地を云石城ハ石槨なり大和國今小初瀬の名あるも此義によれるにや 姥捨山も小初瀬山の轉語なるべし されハこの処墓処ありと云傳へしをそのあるに姥のことをおもひよせてあやしき俗語も起りしなるべし

未結正已結正

續紀丑仁明紀　未発覚已発覚未結正已結正故殺

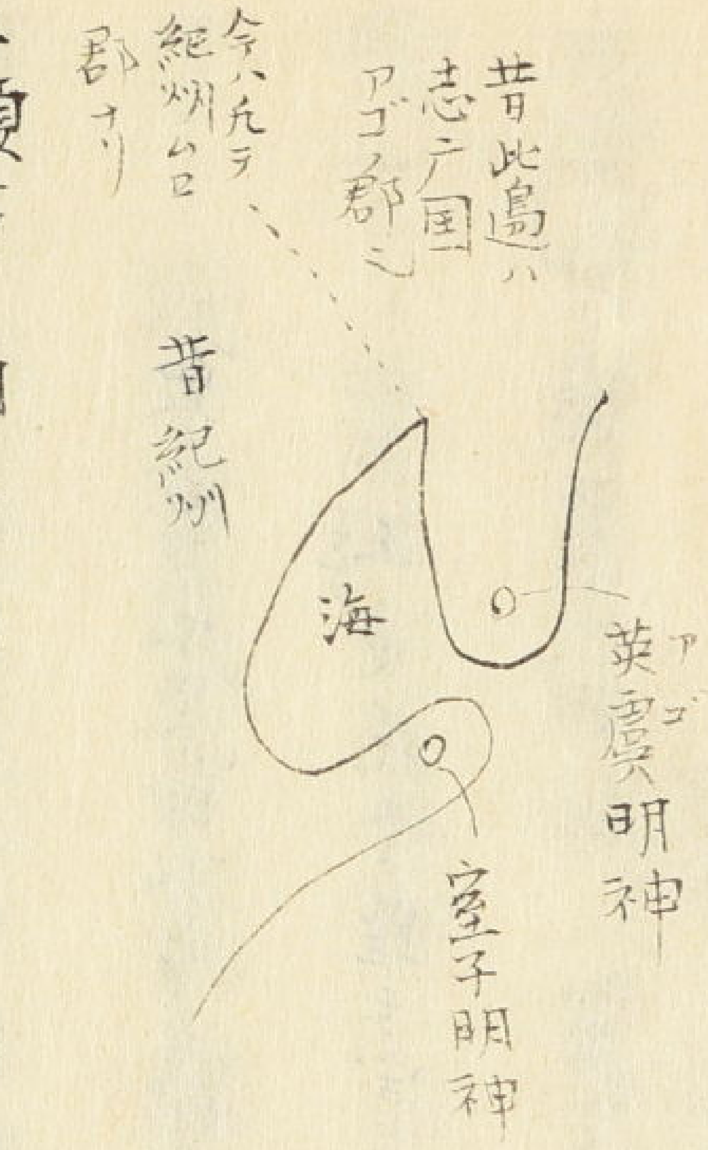
未発覚ハ悪事未タ発覚ザル間ニ囚トナリシ者 已発覚ハ悪事発覚ノ後囚トナルモノナルベシ 未結正已結正ハ古律ヲ案ルニ 雖謀反詞理不能動衆感力不足率人者亦皆斬。謂結謀真實而不能為害者ヲ云トアルニ依レバ正ハ反逆ストイエドモ害ヲナスニ足ラザルヲ云ナリ 是レハ謀反ニ云詞ナリ

○

英虞大明神　室子大明神

紀州牟婁郡二木島村ニ室子大明神アリ 土人ノ伝ニ神武天皇

の御兄ナありト案ルに五瀬命ここに薨れたまへるよしの上或人云り



直澄案ルにアゴ明神ハ神武天皇
あるへし天皇の御歌にアゴヨアゴヨ
しメかししノ云云トあるより起れり
五瀬命山崩たまひて石室の中に鎮めまつりしより室子明神とも
いふなるべし

○山多豆　本居豊頴話

万葉ニ　きみが行け長くなりぬ山多豆乃迎をゆかむまつにはまたじ
古事記允恭天皇條　軽太郎女ノ歌也　注此云山多豆者是今造木

者也とあり　和名抄　接骨木　本草云接骨木　和名美夜都古木
本草啓蒙　接骨木　タヅノキ　キタヅ　ニハトコ　とあるは是なり　古事記
造木ハミヤツコギトヨムベシ　國造ノ造ニ同じ　接骨木ハ其葉對生
なるが故に向ノ冠辞トナレルナリ　これは紀世人其ノ名あやしと云今始名を失ひたり
ニハトコとなりしミヤツコの訛なるべし

○五瀬三宮二社鎮座本紀　一冊
上州館林廣済禅寺　嗣祖沙門潮音撰述
自序曰　於茲従大成経抜群華類撰述五瀬
三宮二社鎮座本紀以翼好古君子視之則於神道
未必無小補云
天和二壬戌年　小春吉旦

この書に凡て取れも足らぬうらことのしるあり 其中に 地神本紀曰

云云 高皇産霊尊聞之宰之告曰吾所産子凡有一千五百座兒其中一兒最小身者仍怪取之置掌愛之自指間漏落其者必彼焉故與之於汝葦原色男尊乃為兄弟宜愛養矣在於三輪別宮少彦名命神也其頭少彦名神所謂久延彦神今者山田之案山子部祭神なり 云云とあるハ何うよりところあるにや

摂津志二四 赤留比売命神社 舊在平野町南今遷町東稱三十歩 日本紀古事記皆曰天日矛之妻也

天日桙

天日桙の神ハ播磨風土記によるに大國主神の時 韓國新羅より渡り来る神なり 風土記曰天日槍命従韓國度来到於宇頭川底而乞宿處於葦原志挙乎命曰汝為國主欲得吾所宿之處 志挙即許海中 爾時客神以劔攪海水而宿之 主神即畏客神之盛行而先欲與國巡上 云云とあると日本紀少彦名命の条によく似たり 釈紀十

筑前國風土記曰怡土郡昔者穴戸豊浦宮御宇足仲彦天皇将討球磨噌唹幸筑紫之時云云 五十跡手奏曰

高麗國意呂山ニ自天降来ル日桙之苗裔五十跡手是也云云とある自天降来とハいへるも少彦名命に似たりそハともあれ日本紀ニ垂仁天皇三年ニ新羅王子天日槍来帰焉とあるハ大なる誤なり古事記ニ案ふるに昔有ニ新羅国主之子名謂ニ天之日矛是人参渡来也云云

應神天皇ノ巻

とある昔ハ神代のことにて崇神天皇の御世ハあらじ此の次に耕人等（タビトドモノ）之飲食（クラヒモノヲ）負ニ一牛（オホセテウシニ）而入ニ山谷之中（タニノナカニイリケリ）云云とあるハ古語拾遺の大地主神の牛肉を田人に食しむる条に甚似たり（似て）八十神雖ニ欲得ニ是伊豆志袁登賣云云の文ハ八十神と八上比賣を婚ふ古事の混れ入りたるさまに見ゆ故天日槍ハ大國主神に韓国より度り来しといへる傳を以て正とすべし

こあハたし

鎮火祭祝詞にこアハタシとあるハ御巫氏の説に字鏡に惶息阿和豆とあるを佐行に活したるなりといへれと祝詞にハ見阿波多志とあれハ假字たかへりいへるのある従ふへからさるへし

（御巫氏ハ字鏡ノ假字誤レリ）

佛足石歌　申

佐々義麻宇佐牟　捧ケ賜サムニ

跋ニ南都薬師寺有佛足石焉天平勝寳八年中文室真人浄三所作也

訛

うつぼ物語
こもう人まあれに　高麗人こ　あやしうめつらしきことをあり
十二歳まてあうあうしつ　三人の人ひとみをつどへて云云つわまみのりぬ
三 鞍置 くらおき 青 あを 馬 むま 出てたどりありきて
たがむ 拝　すへ 居　をの 己　をと 音　八輪　をあし 把 たらしあて
うへ 植　をくる 送　をき 置　すまゐ 住　をさて 掟
はぢ風 オ　をり 折　まいり 参　そのつら 自　むかれ 生
をのし 呑　をこまひ 行　ゆへ 故　むまご 三代のむまご　たしむ 惜
もも 重　たましゐ 魂　つかうまつる 仕奉　たぢろく

日本霊異記
婚 オウナ　嗟 サヽヤヒテ　禳 宇波伊阿波計 朱千留和之　寝 宍采子ル
叩 タヽイテ　嬢 ヲウナ
訛 ツルヘル　糯 モチイ

和名抄
結果 楊氏漢語抄云結果形如結緒此間亦有之今按加久乃阿和トアリ
江家次第ニ加久縄トアルニヨレバ阿和ハ阿波ニ作ルベシ

伊呂波音訓傳　　釋慧眼撰　明和壬辰

一ノ十九丁 ○夫國字ノ本源ハ天地開ケ陰陽分レシトキ文字ステニ出現ス故ニ秘府論弘法大師撰述曰ク能ク空中塵中ニ開ク本有之字ヲ亀上龍上ニ演ス自然之文ヲト云云 空中本有ノ字トハ西天ニテハ所謂十二摩多三十五ノ體文ナラン吾朝ニテハ神代ノひふみよいむなノ四十七字ナルベシ然ルヲ衆人挙テ和字ハ空海ヨリ起トイヘリ皆是神秘ヲ知スシテ但一往ノ説ヲナス大師ノ曰ク文字ハ自然ニ現スト豈コレ虚談ナランヤ

二ノ七丁 ○予謂ニ文字ハ神代ノ字ニシテ句作（いろはにほへと等）ハ弘法ノ述作ナラン譬ハ今日ノ人歌ヲ詠スルカ如シ句ヲ作テ字ヲ不作

○山槐記ニ曰今日詣ニ三蔵院法印ニ次伊呂波ヲ又舊録ニ云々以

右四十七字ハ即チ是神代常世之詠語也

三十五丁 つり 案スルニ別摩多第三ノ梨ノ[梵字](リ)字ナルベシ

三ノ三十丁 り 案スルニ梵文ノ諍論ノ[梵字](メ)ナリ

四ノ一丁 ら 案スルニ梵文ノ塵垢ノ[梵字](ラ)字ナリ或ハ相ノ[梵字](ラ)字ナリ

八丁 う 案スルニ梵文ノ譬喩ノ[梵字](ウ)字ナリ

廿九丁 く 按スルニ梵文ノ支分ノ[梵字](ク)字ナリ

五ノ一丁 あ 按スルニ梵文ノ本不生ノ[梵字](ア)字ナリ

三ノ四丁 わ 按スルニ梵文ノ言説ノ[梵字](ワ)字ナリ

六書通

冊　冊ノ古字 六書通ニ古者汗竹ニ為簡編簡為冊象非比巻束形ニ云古者大事乃登冊書ス小字ハ則用ニ方版ヲ

冊　典ノ古字 同書ニ帝王之道載于冊曰典國之常經也从冊在六上ニ尊ニ崇之意

天神本紀曰天照太神以四十七言詔告大巳貴尊其霊句ニ云
ひ人 ふ含 み道 よ善 い余 む殺 な多 や親 こ児 と倫 も元 ち因 ろ心 ら顕 ね錬 し忍 き君 る主 ゆ豊 ゐ位 つ臣 わ私
ぬ盗 そ物 を男 た田 は園 く耘 め女 か蠶 う績 お織 に家 さ饒 り栄 へ理 て宣 の照 ま法 す守 あ進 せ悪 ゑ攻 ほ絶
れ欲 け我 刪
如是宣ニ依テ大巳貴尊與ニ天八意命同メ意ヲ以テ是ノ言ヲ造ル神代文字ヲ以テ是四十七言ヲ國字之初ト為シ通連作萬言句ヲ云云

伊勢ノ員辨郡上笠田下笠田村アリ　この田ハさ田の誤乎

安濃郡ニ岸田村アリ
津町ノあル西二里ニアリ
此村三ツニ分ル井戸
前田久保是アリ

安齋叢書二十七ニ舊事大成経ト云本ハ偽書也天和ノ比
上野國黒瀧ノ潮音禅寺并勢州ノさゝ田の神主永野
采女取持て板行ニ出ス右偽書ヲ作れ旨露顕ニ及ヒ
采女ハ遠島ニ成り潮音モ遠島ニ成ベキノ處桂昌院
様 常憲院殿 御母堂ニ 御頼ニ依ノ僧ナリケレバ寺ヘ預サレ隠居シタリ
右板行出シタル本屋豊島屋豊八ハ追放ニ成シナリ

潮音了

直澄案ルニ同人ノ著述ニ五瀬三宮二社鎮座本紀ト云書アリ
上州館林廣濟禅寺嗣祖沙门潮音撰述トアリテ天和
二壬戌年小春吉旦ト云奥書アレバ上野ノ人ナリ 群書一覧
ニ美濃國ノ僧トセルハ誤ナラン 美濃を衍りし也
同書ニ、桂秋齋カ薄草ニ云上野國黒瀧ノ潮音禅僧也
元肥前國ノ人ニテ美濃國ニ住ス館林ノ廣濟寺住職
其後大成経ノ事ニテ不首尾ニ成上野ノ黒瀧山ニ轉住由也

鼓ツヽミ

和名抄

和名抄 大鼓オホツヽミ 附 抱ツヽミバチ

律書樂圖ニ云ニ爾雅ニ大鼓謂之鼖フント 音墳 和名於保豆々美

一具ニ云四乃豆々美 今案細腰鼓有一二三之名皆以鹿之節次第ニ取ル名ツ也 即建鼓也

兼名苑ニ云 槌ツイ 一名 枹 音浮 字亦作桴 俗云豆々美乃波知 所以撃大鼓也

手鼓 安斎叢書六 壹岐判官知康手鼓ノ上手ナリシ故鼓判官ト云名ヲ得タリ 東鑑源平盛衰記平家物語等ニ見エタリ

手鼓トハ今ノ小鼓ナルベシ 鼓トハ革ヲ張リテ鳴ス物ノ総名ナリ

大鼓鞨鼓等ハ撥ニ以テ打ナリ 小鼓ハ手ヲ以テ打ツユヘ手鼓ト云ナルベシト云云

高良玉垂神社神庫所藏

真鍮印

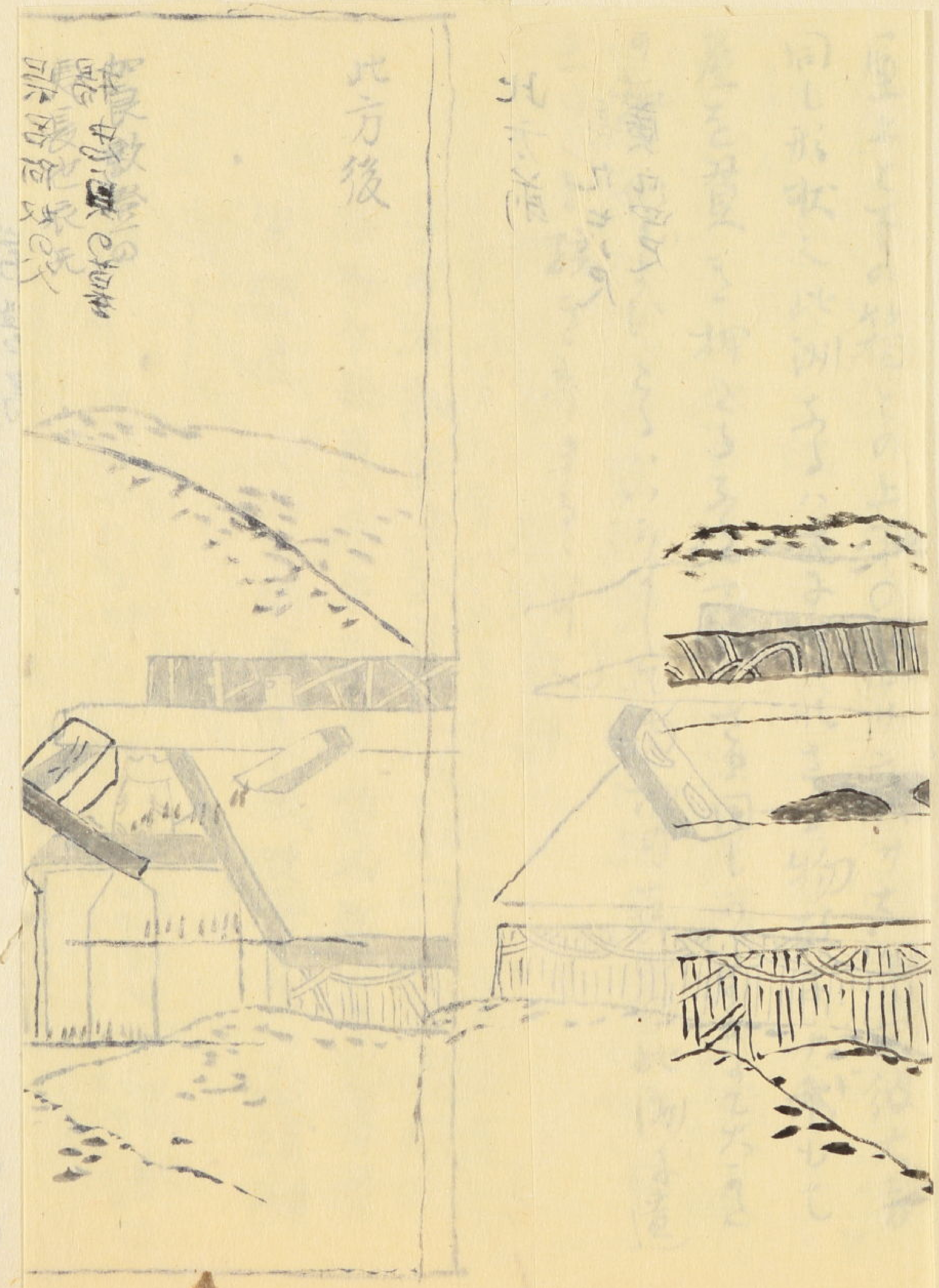
鈕銀鯉

彫刻セシニアラズ植字ナリ

筑後國御井郡國分村住

中村水哉所藏

藏印



蝦夷国棺

梲ハ梲カ ウツバリト訓ス

蝦夷東西考證（二冊 前田夏蔭著）内地ニてハ棺槨ハ皆墓地ニ
埋蔵するを此地の風俗ハ棺の半を土ニ埋ミ半ハ上ニ
出し彫(ホリ)の異なるのミ 其棺の製法ハ長サ凡七八尺許
ニして搏風(ハフ)もて屋上板を左右より斜ニ覆ひて
梲の本ニ通せりと云 遐西安八刀男圖考ニ加良富
登の夷長（西道の太奈ニ居ニ住）也良光呉呂(エムゴロ)阿以奴(アイヌ)の父（満別人より姓名を授けられて楊忠良と云）の墓の図をミるに其棺のさま彼筑紫
磐石井の墓の石棺の図面ニ其製似のよひて磐井の
造れるハ土ニ隠れたれハ全形ハ見へえされと前の形

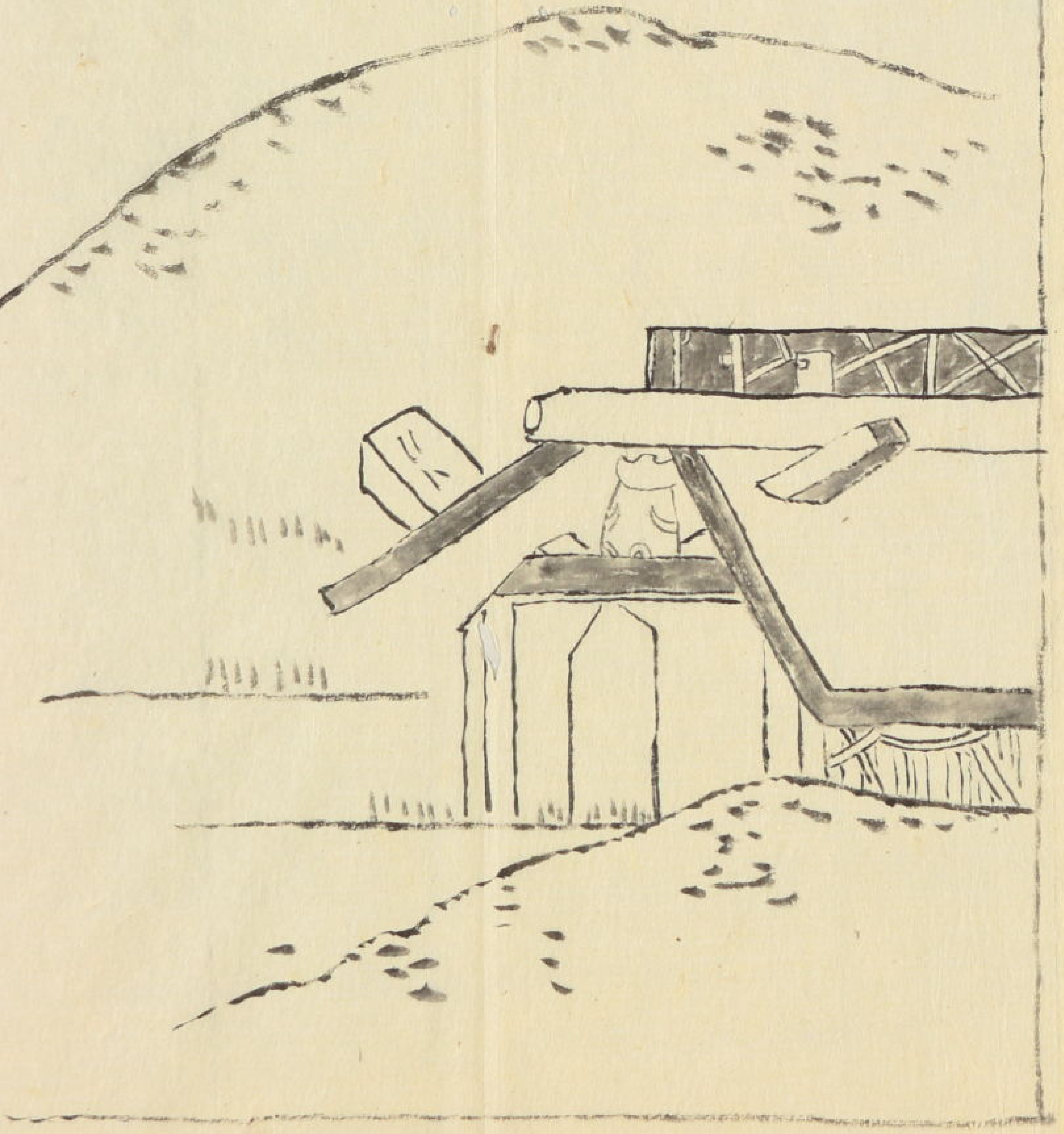
梲ハ梲カ
ウツバリト
訓ス

蝦夷国ノ棺

蝦夷東西考證 二冊 前田 夏蔭著 内地まてハ棺槨ハ皆墓地に埋蔵せるを此地の風俗ハ棺の半を土に埋し半ハ上に出し樹(オホ)ふ異なるのミ其棺の製法ハ長サ凡七八尺許にして搏風(ハフ)もて屋上板を左右より斜に覆ひきて梲の本に通せり云云 寫遮安ハ男々蘭考に加良富登の夷長 西道の奈与呂子住 也良无呉呂阿以奴(エムゴロアイヌ)の父 満別人より姓名を授られて楊忠貞と云 の墓の圖をとるに其棺のさま彼筑紫磐井の墓の石棺の圖面に其製似のよひて磐井の造れるハ土に隠れたれハ全形ハ見えされとも前の形屋上と下の箱との上下の高サ廣サなと是彼大方同し形状 此洲なるハ土に埋れさる物故に千木(チギ)もて屋を覆ひたるを押とゝるるを其のさま同しうきたるを大凡の趣の似たるハいうまして内地の古風の此洲に遺たらんと孩き奇まるてけり

此方後

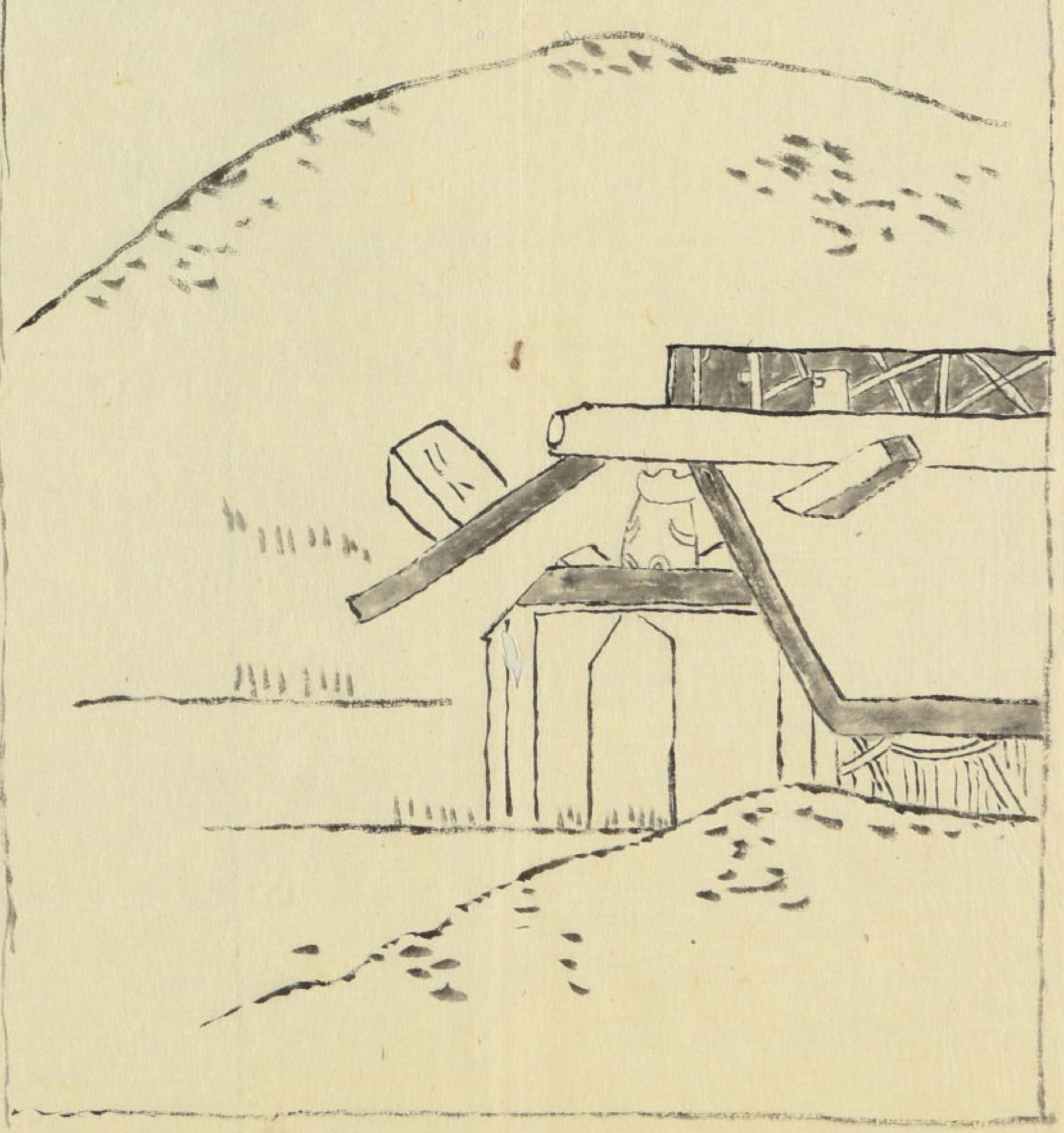
加良數登の
夷長也良无
呉呂阿奴の父
楊忠貞の墓



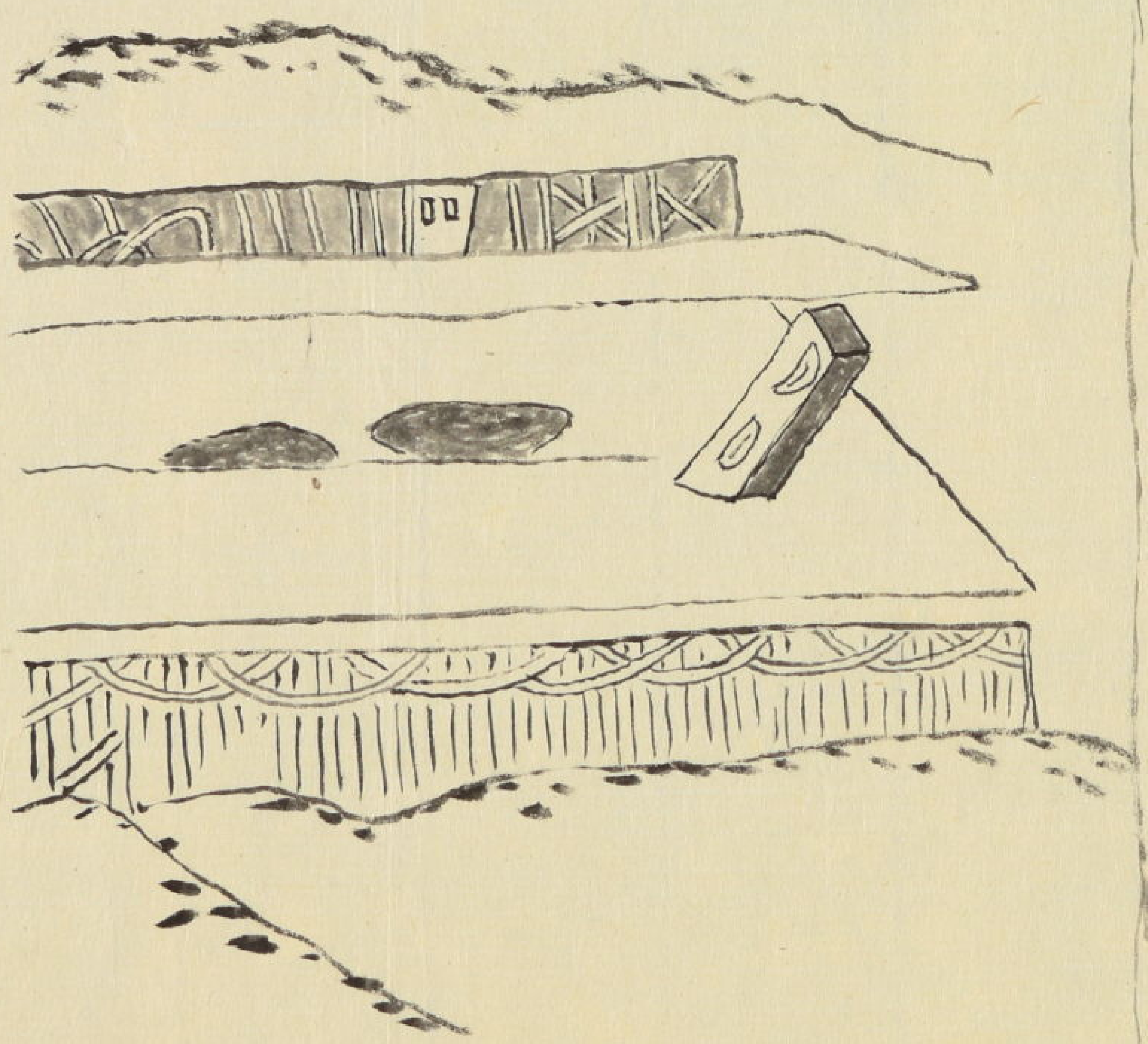
屋上と下の箱との上下の高サ廣サ志と是彼大方
同し形状ニ此洲なるハ土ニ埋れさる物故ニ千木(チギ)もて
屋を覆ふを押へたるさま宇の字同しうさまて大こと
の趣の例ともしなるハいうもして内地の古凡の此洲ニ遺
をらんと孩き奇まるをしけむ

此方後

加良數登一の
東長世衣先
呉呂阿奴の父
楊忠貞の墓



此方前
長凡七八尺
廣凡四尺



常磐島

北夷史徴一冊　奥羽の風土記を記したる書の中に津軽郡のまゝ載せる所ハ

常盤島　北海中有巨島。迫蝦地。其以北靺鞨國也。冬候嚴凝。至寒甚。堅氷滞海。自暮春至中秋。鴻雁在此島上。世稱曰之常盤島。

○輪轎車　赤旗青幡

黒坂命征討陸奥蝦夷。事了凱旋。及多歌郡角枯之山。黒坂命遇病身故。爰改角枯號黒前山。黒坂命之輪轎車發黒前之山。到日高見之國。葬具儀。赤旗青幡。交雜飄颺。雲飛虹張。瑩野耀路。時人謂之幡垂國。後世言便稱信太國。

常陸風土記補缺ノ注ニ按此文仙覺萬葉集註釋所引而本国風土記逸文也

按今多賀郡有黒坂村

日高見國未詳。景行紀廿七年武内宿祢自東國還之奏言東夷之中有日高見国云云　同廿八年蝦夷既平自日高見国還之西南歴常陸到甲斐国酒折宮ニ云云　神名式陸奥国桃生郡日高見神社

益謂陸奥國也

直澄云夫常陸國者云云ノ下ニ古人曰常世之國蓋疑ハ
此地ノ下ニ松下見林ノ本ニハ或曰日高見国ノ六字アリ又風土記脱アリテ無キ本多シ
五下古老曰ノ下ニ置信太郡此地本日高見国也トアルハ
小寺本ニアルノミニテ諸本ニナシト云ヘリ然レハ風土記ナル日高見国ハ

後人ノ換入ナルベシ

○石屋　石城

常陸風土記ニ云　古老曰古有山賊名曰油置賣命今社中ニ在石屋俗歌曰許智多雞波乎婆頭世夜麻能伊波歸尓母爲弖許母郎奈古非叙和支母古

萬葉集ニ事之有者小泊瀬山乃石城尓母隱者共尓莫思吾背　云云

山田與清云小初瀬者古謂陵墓地石城石槨也大和国今有小初瀬名亦以此義也

墓隧安キニ石城トモ石屋トモ云ヲ以テ見レハ石槨ニハアラズ

右ハ墓ヲ作ル岩石屋ノ如クシテ棺ヲ横ヨリ入ルヽナリサレハ墓ヲ云ナルベシ

○倭武尊到蝦夷国

常陸風土記ニ倭武天皇巡狩天下征平海北當是經過

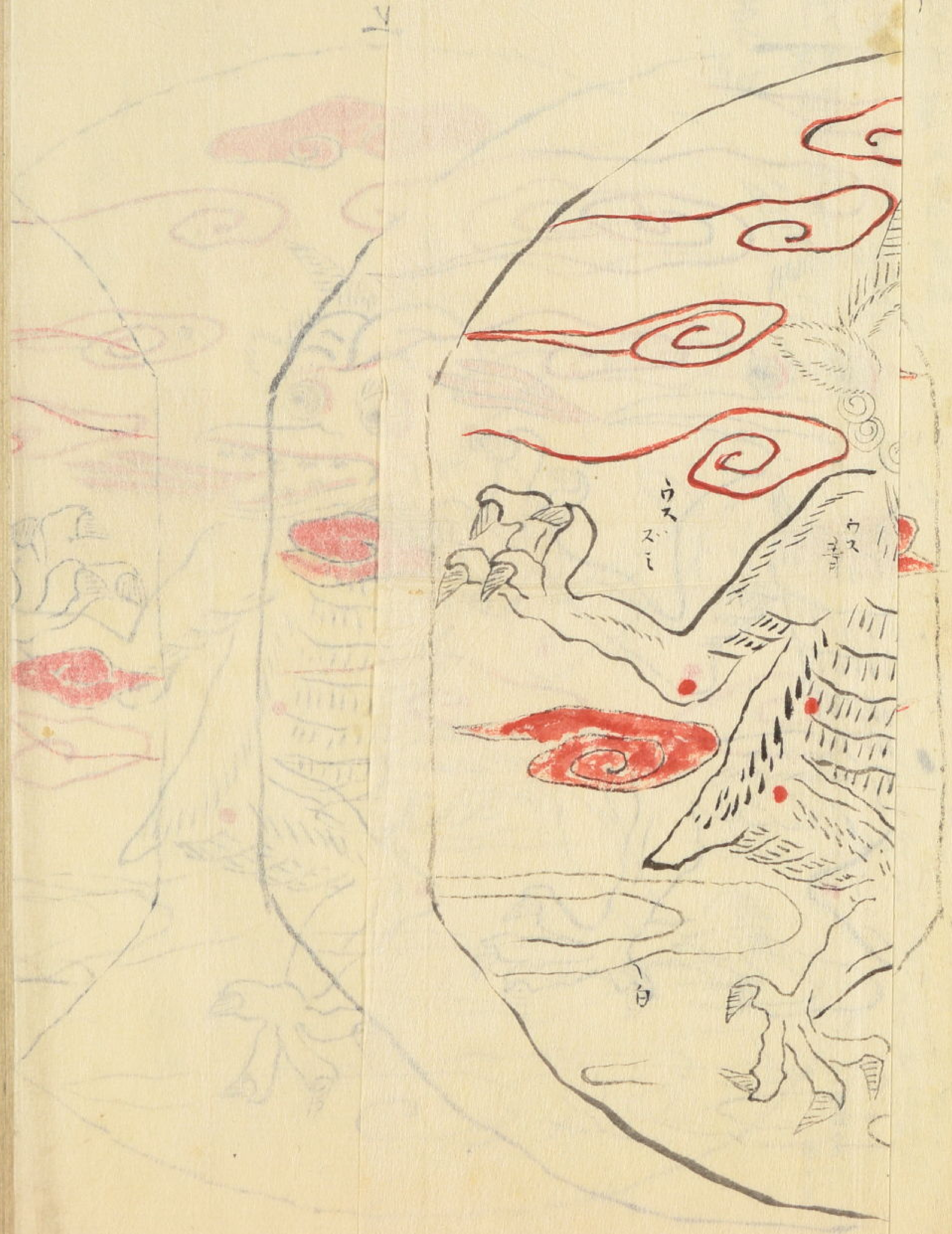
此国ヲ云云トアルヲ以テ海ヲ越エテ北ノ国ニ至ル今ノ北海道ナルヲ知ルベシ〔古天皇ニ及ス〕陸奥国風土記　八槻郡ノ条　纏向ノ日代ノ宮ニ御宇天皇詔ニ日本武尊ニ而往討土知朱ヲ矢土知朱等合力防禦且誅津軽蝦夷ヲ許多連張リ猪鹿弓猪鹿矢於石城ニ而射官兵ト云云ト津軽蝦夷ハ北海道ノ夷ノ津軽ニ来リシ者ナルベシ猪鹿弓等ヲ用ルモ今ノ北海道ノ夷ニ合ヘリ

石垣

常陸風土記廿六丁ウ　其社以石為垣中ニ種属甚多　云云

白幡

同十五丁　倭武天皇巡行云云　寸津毗賣懼悚心愁表挙白幡迎道奉拝天皇　云云



荒々公（アララ）

姓氏録 荒々公 任那國豊貴王之後也 ○ 雜姓竹原連阿
羅之國主 云云之後也 ○ 按ニ武塔天神ニ縁アルカ

荒々公（カラヽ）

姓氏録　荒々公　任那国豊貴王之後也○雑姓竹原連阿
羅之国主　云云之後也の按に武塔天神之像アルカ

文花帖

加茂社競馬
装束紋

墨雲ハ
白ナリ

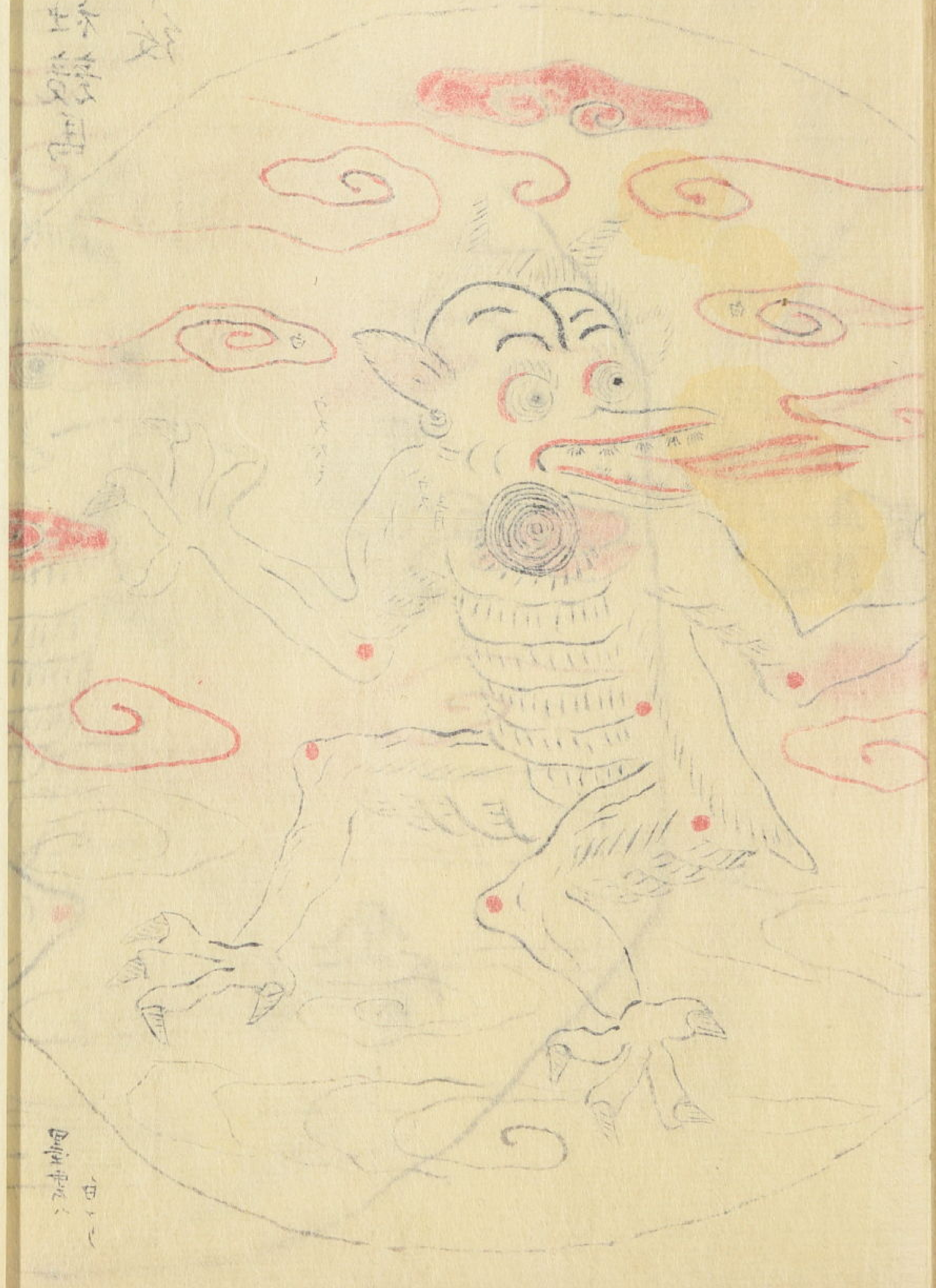
文花帖

加茂社競馬
装束紋

墨雲ハ白ナリ

同上

[illegible]



[illegible]

高句麗

朝鮮史略曰東扶餘王金蛙扶余王解夫婁老無子求嗣祭山川所御馬至鯤淵見大石相對而流涙轉石有小兒金色蛙形喜而養之名曰金蛙及長立為太子得河伯女柳花于太白山南優渤水在今寧邊府幽于室中為日影所照而娠生一卵蛙欲剖之不能母裹置暖處有男子破殼而出骨表英偉七歳自作弓矢発無不中名為朱蒙扶餘俗謂善射者為朱蒙蛙七子忌欲殺之朱蒙乃與烏伊陝父摩離等行至淹淲水無梁祝曰我天帝子河伯外甥今日逃亂追者將及奈何於是魚鼈成橋得渡橋解追兵不及至毛屯谷遇三賢麻衣衲衣水藻衣俱至卒本扶餘今成川府其王無子妻以女生沸流及温祚王薨朱蒙嗣自称高辛之後国號高句麗

○朱蒙立 漢元帝建昭二年

因姓高

○隋書東夷傳曰高麗之先出自夫餘夫餘王嘗得河伯女因閉於室内為日光隨而照之感而遂孕生一大卵有一男子破殼而出名曰朱蒙扶餘之臣以朱蒙非人所生咸請殺之王不聽及壯因從獵所獲居多又請殺之朱蒙棄夫餘東南走遇一大水不可越朱蒙曰我是河伯之外孫日之子也今有難而追兵且及如何得渡於是魚鼈積而成橋朱蒙遂渡建國自號高句麗以高為氏

○史略 高句麗王朱蒙以在東扶餘時所娶禮氏女子類利為太子温祚与兄沸流恐不相容南行沸流居彌鄒忽今仁川府温祚都河南慰礼城今稷山縣國號百濟後徙南漢山城今廣州又徙南平壤城今漢京以扶餘為氏系出扶余故云

⊙温祚立 漢鴻嘉三年

○續日本紀 延暦九年 云々上表言眞道等本系出自百濟國貴須王貴須王者百濟始興第十六世王也夫百濟太祖都慕大王者日神降靈奄扶餘而開國天帝授籙惣諸韓而稱王降及近肖古王遥慕聖化始聘貴國是則神功皇后攝政之年也云々

○欽明天皇十六年紀 十六年春二月百濟王子餘昌遣王子惠云々蘇我卿曰云々原夫建國神者天地割判之代草木言語之時自天降來造立國家之神也頃聞汝國輟而不祀方今悛悔前過脩理神宮奉祭神靈國可昌盛汝當莫忘

○仲哀天皇紀八年 筑紫伊都縣主祖五十手云々天皇即美五十迹手曰伊蘇志故時人號五十手之本土曰伊蘇國今謂伊都者訛也

○釈紀 筑前風土記曰怡土郡昔穴戸豊浦宮御宇足仲彦天皇將討球磨噌唹幸筑紫之時怡土縣主等祖五十跡手聞天皇行幸參迎穴門引嶋天皇勅問阿誰人五十跡手奏曰高麗國意呂山自天降來日桙苗裔五十跡手是也天皇於斯賞五十跡手曰恪乎 高麗云 今桜意呂山蔚山之轉也 神名式大隅郡韓國宇豆峯神社今桜意呂山宇豆峯共ニ蔚山之轉也

伊蘇志 恪勤也

○天日桙 姓氏録 右京 絲井連 三宅連同祖新羅國人天日槍命之後也○三宅連 新羅王子天日桙命之後也 アル絲井ハ伊都縣主ト同義ナルベシ○呉服造 百濟國人阿漏史之後也○衣縫 百濟國神靈命之後也○肩〻神紀 十四年 百濟王貢縫衣工女是今來目衣縫之始祖也トアルニヨリテ考フレハ姓氏録服部連 天御中主命十一世孫天御桙命之後也トアルハ天日桙命ナルベシ

姓氏録 右京諸蕃 三宅連 新羅 橘守 同祖天日桙命之後也

國造本紀 瑞籬朝御世 神大和直同祖御戈命定賜久比岐國造 按神武紀大和直祖椎根津彦也

伊豆國造祖 神功皇后御世 物部連祖天藙桙命也 同名異人乎

和名抄大和國 山辺郡服部 波止利 式 城下郡 服部神社

○天武紀十三年 神服部 按スルニ姓氏録ノ和造 日置造同祖伊利須使主之後也 ○日置造 高麗國人伊利須使主之後也 ○和連 百濟國主雄蘇利紀王之後也 一温祚ノ轉音カ 一東明王ノ子

連賜姓曰宿祢

○旧事記 天孫本紀 伊也 ○和朝臣 百濟國都慕王十八世孫武寧王之後也 東明王名朱蒙

○天武紀十二年 倭直賜姓曰連

曰饒速日尊六世孫建田背命 神服連等祖

天日桙命 → 新羅 → 絲井連・三宅連・橘守

天御桙命 → 和連・日置造・和朝臣・服部連

姓氏録
服部連
摂津神別
熯之速日命十二世孫麻羅宿祢之後也 允恭天皇御世任織部司惣領諸国織部因号服部連
河内神別
服部連 熯之速日命之後也

神武紀 椎根津彦 此即倭直等始祖也
天武紀十年 倭直龍麿賜姓曰連
天武紀十二年 倭直賜姓曰連 ココニ至テ倭氏書直ヲ姓ヲ賜ヒ連トナス
同十四年 倭連賜姓忌寸
姓氏録 大和国神別 曰大和宿祢出自神知津命 名宇豆彦 聞天神子来 故以奉迎 即率納皇船以為導 仍號神知津彦 一名椎根津彦 能宣軍機之策 天皇嘉之任大和国
造 是大和始祖也
按姓氏録青海首倭太物忌直等稱直等此支別

姓氏録摂津諸蕃
蔵人 石上巳守同祖 阿智王之後也
石占忌寸 坂上宿祢同祖
続日本紀巻廿九ノ廿二丁 摂津国
菟原郡人正八位上倉人水守等十八人賜姓大和連
続紀卅八ノ廿七丁 坂上苅田麻呂等上表言臣等本是後漢霊帝之曾孫阿智王之後也

姓氏録
大和連 神知津彦命十一世孫御物足尼之後也
物忌直 椎根津彦命九世孫矢代宿祢之後也
青海首 椎根津彦命之後也
倭太 神知津彦命之後也

河内神別 等祢直 椎根津彦命之後也

敏達天皇 ― 百済王

姓氏録左京皇別 大原真人 出自諡敏達孫百済王 続日本紀合

島根真人 大原真人同祖百済王之後也

豊国真人 大原真人同祖 続日本紀合

吉野真人 山於(ヤマノヘ)真人 桑田真人 池上真人

海上真人 清原真人 大原真人同祖

神代紀 稜威雄走神 ― 甕速日神 ― 熯速日神 ― 武甕雄槌神

姓氏録摂津神別 熯之速日神 ― 十二世孫 麻羅(マラウラ) ― 服部連

(神代紀 倭鍛冶 允恭紀ニモ見エ同名カ

姓氏録大和神別 鍛部大炊 天三穂命八世孫 意富麻羅之後也

海神

姓氏録右京神別 安曇宿祢 海神綿積豊玉彦神子穂高見
命之後也 ○海犬養 海神綿積命之後也 ○凡海連 同神
男穂高見命之後也 ○八太造 和多罪豊玉彦命児布留
多摩乃命之後也 ○摂津神別 阿曇犬養連 海神大和多罪
神三世孫穂己都久命之後也

服部 三系 倭氏二系

天日桙命之裔

姓氏録曰服部連 天御中主命十一世孫天御桙命之後也 呉服

按続紀卅九以後漢霊帝之曽孫阿智王裔賜姓大和連者甚衆因為大和氏之例也

按天御桙命者天日桙命也 天日桙命者新羅国主子而高
麗百済人多係其裔焉 応神紀十四年百済王貢縫衣工女
是今来目衣縫之始祖也 姓氏録 衣縫 百済国神霊命之
後也 今按神霊指始祖天日桙也 又姓氏録 呉服造 百済
国人阿漏史之後也 蓋阿漏史者天日桙之裔仍之以天日桙
為服部連之祖者也

按筑前風土記天日桙者初自天降神也 垂仁紀崇神紀為新羅王子者誤矣 蓋崇神帝之世自新羅来者天日桙之裔新羅国主之子也

雄略紀十四年呉国使献手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等トアルニヨレハ呉服ハ是ヨリ起ル 姓氏録ニ百済人ヲ呉服ト云ハ混淆ナリ

大和直 天御桙大和氏

国造本紀曰久比岐国造 瑞籬朝御世 大和直同祖御戈命定賜国造
今按御戈命者即上謂大和直同祖者 姓氏録 和連 百済国主雄蘇利紀王之後也 ○和朝臣 百済国都慕王十八世孫武寧王之後也 ○和造日

置造同祖伊利須使主之後也○日置造 高句麗國人伊利須使主之後也是和氏者高麗百濟之裔而以天日梓命為祖者一本爲也以御食命為崇神帝之世人者日本紀既誤況於国造本紀乎

椎根津彦 大和氏

神武紀 椎根津彦 此即倭直等始祖也○姓氏録 大和宿祢 出自神知津彦命 名宇豆彦 云云 一名椎根津彦能宣軍機之策天皇嘉之任大和國造 是大和始祖也○又姓氏録 物忌直 出自海首 倭太等祢直 等為椎根津彦之裔矣 天武紀十二年倭直賜姓曰連 同十四年倭連賜姓曰忌寸 是亦二大和氏賜姓者歟

饒速日命之裔 神服部

旧事記天孫本紀曰 饒速日尊六世孫建田背命 神服部連等祖 天武紀十三年 神服部連賜姓曰宿祢

○姓氏録左京神別 衣縫造 石上同祖 ○石上朝臣 神饒速日命之後也

熯速日命之裔 服部

姓氏録 摂津神別 熯之速日命十二世孫麻羅宿祢之後也 允恭天皇御世任織部司総領諸國織部 因号服部連

○河内神別 服部連 熯之速日命之後也

姓氏録 安曇宿祢 海神綿積豊玉彦神子穗高見命之後也

八太造 和多罪豊玉彦命児布留多麻乃命之後也

阿曇犬養連 海神大和多罪神三世孫穗己都久命之後也

凡海連 安曇宿祢同祖綿積命六世孫小栲梨命之後也

安曇連 于都斯奈賀命之後者 不見

○古事記 阿曇等其綿津見神之子宇都志日金拆命之子孫也

朝鮮開國祖有三統。一曰素戔烏命子伊太祈一名檀君降于太白山國人立為君　二曰天日桙命降于意呂山立為君為高句麗王百濟王之祖也　三曰稲飯命入新羅為國主新羅王之祖也

檀君

日桙

㊁天日桙命　按姓氏録天御中主命十一世孫天御桙命（是日神別有考証）降于意呂山　筑前風土記曰五十跡手奏曰高麗國意呂山自天降來日桙苗裔五十跡手是也（按天御中主天照大神之裔別有考証）日本紀通証曰意呂山蔚山之轉也　一王新羅　日本紀以日桙為新羅王之子者誤也始自天降之神豈可為王子哉　新姓氏録曰三宅連新羅王子天日桙之後也　傳統歴年不詳　蓋按天日桙者天御中主天照大神之裔而㊀天地剖判之代草木言語之時自天降來　欽明紀鞍戈卿謂百濟王

子恵曰原夫建國神者天地剖判之代草木言語之時自天降來造立國家之神也頃聞汝國輟而不祀方今悛悔前過脩理神宮奉祭神靈國可昌盛汝當勿忘　天地剖判之代草木言語之時者指太古未闢之世也然而草木言語之時者指天孫降臨之前大國主之世也因是考之則高句麗百濟東國通鑑及梅村代紀高句麗百濟之祖東扶餘金蛙得河伯女幽于室中為日影所照而娠生朱蒙朱蒙曰我天帝子河伯外甥　隋書曰我是河伯之外孫日之子也　統紀曰日神降靈奄扶餘而開國天帝授符籙總諸韓而稱王云云是以高句麗百濟祖為日神之裔也然日神降靈之時非東明王朱蒙之世者為東明朱蒙之世者悲（?）朱蒙在千有餘年之前　諸史為朱蒙金蛙之時者全非矣

是謂天照大神降天日桙於新羅也是日神降靈是也

至大國主之世　天日桙入日本國詳播磨風土記　日本紀垂仁天皇三年新羅王子天日槍來歸者誤也古事記有昔字是謂昔也　或垂仁記誤傳天日槍為新羅王之子乎　以播磨風土記可証矣

怡土縣主　在筑前怡土郡而振勢威者乎仲哀帝幸于筑紫有賞　神功皇后以怡土為発軍之地矣此時既通漢土者怡土縣主也魏志云伊都國世有王皆統屬女王國　女王指神功皇后也蓋當征韓之誘道者矣

糸井連　三宅連

ワリカキ 漢文帝建昭二年

ワリカキ 漢元帝鴻嘉三年

高句麗都裏 東明之體也

橘守 垂仁紀天皇九十年田道間守遣常世国令求非時香菓 通證曰韓国本田道間守祖先之国故出使之也 天日槍之祖也 檀君

自朝鮮立殷武丁八年立天日槍代之治世千四百十六年

蓋檀君治北部 天日槍治南部 箕子立至周武王之世箕子

東入朝鮮 大巣檀君之王儉城攘之遂王朝鮮 檀君子孫亡

自箕子起箕氏朝鮮立亡一千有餘 絶自日本聘問通信于日本矣

天日槍之裔微弱在枝餘者以崇神帝六十二年起曰高

句麗始祖東明王名朱蒙立 朱蒙第二子溫祚以垂仁帝十五年王

百済是為始祖溫祚王立 後敏達帝孫王百済 高句麗凡二十八世

歴年七百五亡矣 百済凡三十世歴年六百七十八亡矣

稲飯命

新羅遠祖為稲飯命 稲飯命者鸕鷀草葺不合

尊第二子也 神武帝之兄也 與帝共発日向将入大和與長

髄彦戦不利 剣把帰 轉入新羅以母国也 是為紀元前三

年 周惠王十一年 自箕氏王朝鮮歴年若干

國應王十六年亡矣 神武紀曰稲飯命抜剣入海化為鋤持 為鋤持神矣

神 古事記曰稲氷命者為妣国而入坐

海原也 姓氏録曰新良貴彦瀲武鸕鷀草葺不合尊男稲飯命

之後也是於新良国即為国主稲飯命者新羅国王之祖也

按鋤持 鋤者新羅地名也 神功紀宿于鋤海水門 同紀先道至沙比

天智紀取新羅沙鼻岐奴江二城 唐書張亮傳引兵自東萊済海

襲破沙卑城進至建安 持者鎮也 稲飯命之鎮新羅沙卑城以新

羅為妣国 妣者即海神女豊玉姫玉依姫也 然則海宮者新羅也 海神者

新羅人也 新羅地名有龍宮 地名由来或從此記 海宮之傳俗説自是而

起而遂入正史者乎 能可思考矣

稲飯命之裔赫居世王新羅都辰韓之

地国号徐羅伐以朴為姓 俗以瓠為朴

是為崇神天皇四十一年 漢宣帝五鳳元年 朱餘稲飯命自入新羅于茲歴年

六百傳統不詳焉居世而岐山麓高墟村長蘇伐公養之焉育 朝鮮檀君
遺民居東海濱分為六村或曰六部六部立居世為君号居西干居
西干方言王也立閼英為妃謂之二聖弁韓以國來降矣瓠公輔政瓠
公日本人也弁韓
以國來降矣 傳祚凡五十六一姓歴年九百九十二 山宗神帝六十五年
漢元帝竟
寧元年

大駕洛
任那國 任那豜語彌ア那也 宋書夷蛮傳百済新羅任那 任那之字始見于此 一作意富加羅國 加羅任那王所都地名 始來于本 貢日本

垂仁天皇二年任那人及帰于大加羅國王 國王自言負詔 改本國名御間城天皇御名謂弥ア那國

及其帰國 天日王 垂仁天皇 帝皇 敦賞賜赤絹一百匹 新羅人遮之於道而奪
焉 新羅任那二國相怨之始起於此時也 日本紀之遍語
神功皇后討新羅則貢兆於此矣 三十年討新羅 朝鮮史略
南解王立号次々雄 倭侵新羅邊郡自此屢 至神功皇后被神祇之教大發軍討新羅
犯邊境
新羅王太宗解尼師今 降服焉
日本紀作波沙寐錦誤波沙者六世王而年紀不合
十世奈解尼師今當神功皇后元年辛巳
十世奈解尼師
奈解王之時 降服焉自此每年有八十船調貢矣高句麗百

済來降永称西蕃不絶朝貢矣 新羅傳祚凡五十六歴年
九百九十二

○

隋書曰新羅百済皆以倭為大國多珍物並敬仰之
恒通使往來云々 明世法録曰其属國有五十餘 新羅
百済 莫州々属國

按素尊自天降之時至子經歴万國之間 所生也

○伊太祈

伊太祈者素戔烏尊之子也 十甲檀君 君音支渾君一作山昆 支同例 又与太祈通音 与太祈通音
一名五十猛又伊太祈曾又大屋彦又韓神曾保利又坐韓
國伊太氏 韓名檀君 与木祈通音 君音支 植樹木有功 伽 曰之 為
渾君一作尚比支同例○
木神 韓一名王儉 儉木也本邦謂木曰幾曰計 儉与計通音 邦音相通 素戔烏之尊自

○日本書紀曰檀君郎素戔烏尊子伊太祈神也檀君与太祈通音
紀五十猛神天降之時多将樹種下
天降 經歴万國 出雲風土記曰神須佐乃烏命天壁立廻坐之 是也
師其子伊太祈

然不殖韓国
盡以持帰遂
始自筑紫凡
大八洲国内莫
不播殖而成青
山焉 所以称爲
猛之命爲有功之
神 即紀伊国所
坐大神是也
按素戔烏尊
自天降時至子
埜経歴可国
之間所生也

入朝鮮（除）之時霖雨（素戔烏尊）

便素尊辛苦矣
素尊結束青草
乃爲笠蓑而往
雖乞宿於衆
衆因其暴悪
不許素尊辛苦
遂到于蘇尸茂利之
地

二 神代紀曰素戔烏尊帥其子五十猛神降到於新
羅国居曾尸茂梨之処 神代紀甲子時霖也素
一 神代紀曰于時霖也素戔烏尊結束青草以爲笠蓑而
乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁悪而見逐謫
者如何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不得
留休而辛苦降矣
三 按曽尸茂梨 曽尸茂梨所居之地 楽家録曰蘇志摩
利一曽之尸茂利是新羅之曲也 紀通証見林曰高麗
曲有蘇志摩利 云云 曽閑其舞舞因著蓑笠
以屈折蓋模素戔尊流離辛苦之體也

素戔嗚尊入朝鮮之後直到来于本邦（航）　擬伊太祁王朝
神代紀曰 素戔烏尊帥其子五十猛神降到於新羅居曾尸茂利之処乃
興言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乗之東渡到出雲国簸
川上所在鳥上之峯

國人立伊太祁王爲君國號朝鮮都平壌（従白岳）
朝鮮史略曰東方初無君長有神人降于太白山檀木下國人
立爲君国號朝鮮 都平壌後徙白岳後入阿斯達山爲神於是爲檀君太白
山在今寧辺府即妙香山 朝鮮八域誌曰古帝堯之時有神人降平安道
价川縣妙香山檀木下化生君宗屈之中號檀君爲九夷君長年
代子孫不可記 按檀君者 稱諸檀神也 韓人不知之 因字義成説
諸以強附會 遂失根義可惜矣 改檀君降于太白山居
木下 解 國人立爲君之文則可解也矣
有神人降于太白
山檀木下國人
立爲君

伊太祁王朝鮮乃是事 尭二十五年戊辰 紀元前千六百十三年（唐尭二十五）
年戊辰 朝鮮史略 古紀云檀君與尭並立至商武丁八年乃神寿四千十八
云云 蓋伝世歴年則檀君寿也 按自商武八年前九百五十七年
以唐尭戊辰 當檀君年紀 以四千十八 當爲素戔烏尊入朝鮮之時歟

今所祭
紀國神祭
伊太祁
多祈曽社之神是也
歴年 伊太祁遂到来于本邦（航）
多持樹種續布 八洲 朝鮮史略曰徙白岳後阿斯達
八洲之山 朝鮮 山阿斯達山今九月山也注曰商武

丁八☐年秀☐外☐☐此時航于本邦也 蓋子孫在其國有王億城者☐化

元☐四百☐十二年 周武王☐世 為箕子所收檀氏亡

高志國

伊弉諾伊弉冉二神奉天神之命 降經理國土 始生磤馭

盧島 縱處々小島 其間有越洲 高志島 日本紀曰 次生越洲是也

古嵯島 屬加良國 按欽明紀任那十國中有古嵯國是也 嵯字典云 ☐☐

慶尚道南對馬西南島中最大者 今慶尚道有巨濟島在之

蓋古古嵯國也

高志島最近于本邦 故其國人始航

人來最速為先

出雲風土記曰 古志郷即屬郡家 伊弉那彌命之時 以日淵河築造池 爾時古志國等到來而為堤即宿

居處 故云古志

高志國有神曰奥津久辰為命 生奴奈宜波比賣 沼河

出雲風土記曰 所造天下大神娶高志國坐神意支都久辰為命子奴奈宜波比賣 今按久辰為者古志居也 奥意支奥也 俾都

男曰奥 女曰邊 奴奈宜波比賣与沼河姫同神 延喜式所載越後國

頸城郡奴奈川神社 蓋後世所鎮祭也 沼河姫也 按北越古韓人多所泊因

之号高志而已 謂韓曰高志

大國主神娶沼河姫為妃 古事記所載

詳于後

娉婚 高志國之沼河比賣 之時歌曰 八千矛神命於八洲國 妻覓於

遠々 高志國 聞有賢女 而云云 按歌意 八千矛神者大國主神也

於八洲無適我之妻 最遠高志 聚之為妻之意也 因之高志者可知

在八島之外而最遠之國 是其高志 北越之證也

又大國主征討高志八國平之

出雲風土記曰 所造天下大神命 將平越八國為而幸時 云云 又所造天下大穴持命

越八國平賜而還坐時 云云 按越八國者朝鮮支那滿洲地之地方而不能有指

其國又臣津野命（素戔嗚四世孫）實高志新羅（佐伎浪沙四国）之地來而作出雲國（出雲風土記曰之）
曰之臣津野命國引詳出雲風土記按此國
風土記皆以本邦韓之地名
姫一名比賣古曾神　臨時祭式曰下照比賣社一座或
赤留比賣　號比賣許曾神社　按下照邦音
新羅稱他國者任那十國之一也子他國者任那十國之一也又古
曾與高志邦音相通　今子他高志而領歟　在新羅
記以備後考

上古物總三韓曰高志（新羅）高志者諸冉二神奉天神之命
所修理之島也　神代紀曰　生越島　越邦音高志　自古属加羅國　加羅任那也欽明紀任那有古嵯國
古嵯任那十國之一也嵯字與曰賁韻楚宜切音雖　按今巨済島
在慶尚道南對馬西北而島中最大者蓋古嵯國也　高志人
始航于本邦　有諸冉二神之時　韓人航于本邦是為嵩矢也
出雲風土記曰古志郷属郡家伊弉那弥命之時以日
淵河築造池爾時古志國等到來而為堤即宿居處故云古志　自是總稱諸韓曰
高志　姓氏録　吉氏百済人杵率秋君之後也又吉志連文宿祢同祖王仁之後也又文宿祢　出漢高帝後高島王　按是物稱
謂漢曰毛呂志古亦同義也　漢及韓曰古志故稱姓吉氏又
○高志國有神曰奥津久辰為（為）島邉津久辰為生
沼河姫　出雲風土記所造天神大神要高志國生神意支都久辰為神俾都久辰而
今奴奈宜波比賣云云今按遠禾康布布奉居謂居古志國也朝鮮
意支都久辰俾都久辰為者奥古志居
邉古志居也古別男女曰奥曰邉古志居

称王曰居西干 居西干与古志加武也謂古志神之謂歟 奴奈宜波比売乃沼河姫也
延喜式所載越後国頸城郡奴奈川神社共豈後世訛誤也 按北越古韓人多所治
越名因是起 越邦言曰古志(邦言相通)
大国主娶沼河姫為妃(一名八千矛) 按古事記八千矛神婚高志沼河
姫之歌 高志者在八洲外之遠地 又大国主征高志八国平之(見出雲風土記日所造)
高志州北越之証也
天下大神命将平越八国者而幸時云云又所造天下大穴持命越八国平賜而還坐時
云云 按越者韓之総称 八国者数国也 未詳指何国
女後大国主子下照姫 一名比売古曾 自高志還(航于本邦) 臨時祭式曰下照比売
社一座 或曰比売古曽
神社 按此神始在新羅加 後航于本邦 見垂仁紀 然此事應在神代 誤与天日桙同一也 下照子他
邦音相通 古曽与高志 邦音相通 高志益領子他 高志之国之神歟 子他者任那十国之
一也 高最近本邦 本邦与外邦交通 自高志始 及加羅 新
羅 高句麗 百済 此等諸国 或臣附 或友封 或国疎
或親密 其建国之神 不得不謂曰為同胞 必不可忽視也

神功皇后系図

○開化天皇—日子坐王—眞若王—迦尓米雷王—息長宿祢—息長帯姫

○天日桙命—麻多能烏—諸助—斐文泥—日楢杵—比多加—高額姫

清彦 紀守ヲ清彦ノ子トス

(古事記云)

倭土

継体天皇二十三年 新羅抄掠金官。背伐。安多。委陀。是為四村 ○敏達四年紀 新羅遣使進多々羅。須那羅。和陀。発鬼四邑之調 推古天皇八年紀曰 割多多羅。素奈羅。弗知鬼委陀南加羅阿羅六城以請服

継体紀一書曰多々羅。素那羅。知多。費智 敏作和多費智

今按漢土称我倭奴者起于此 和委音相通 陀奴多音相通

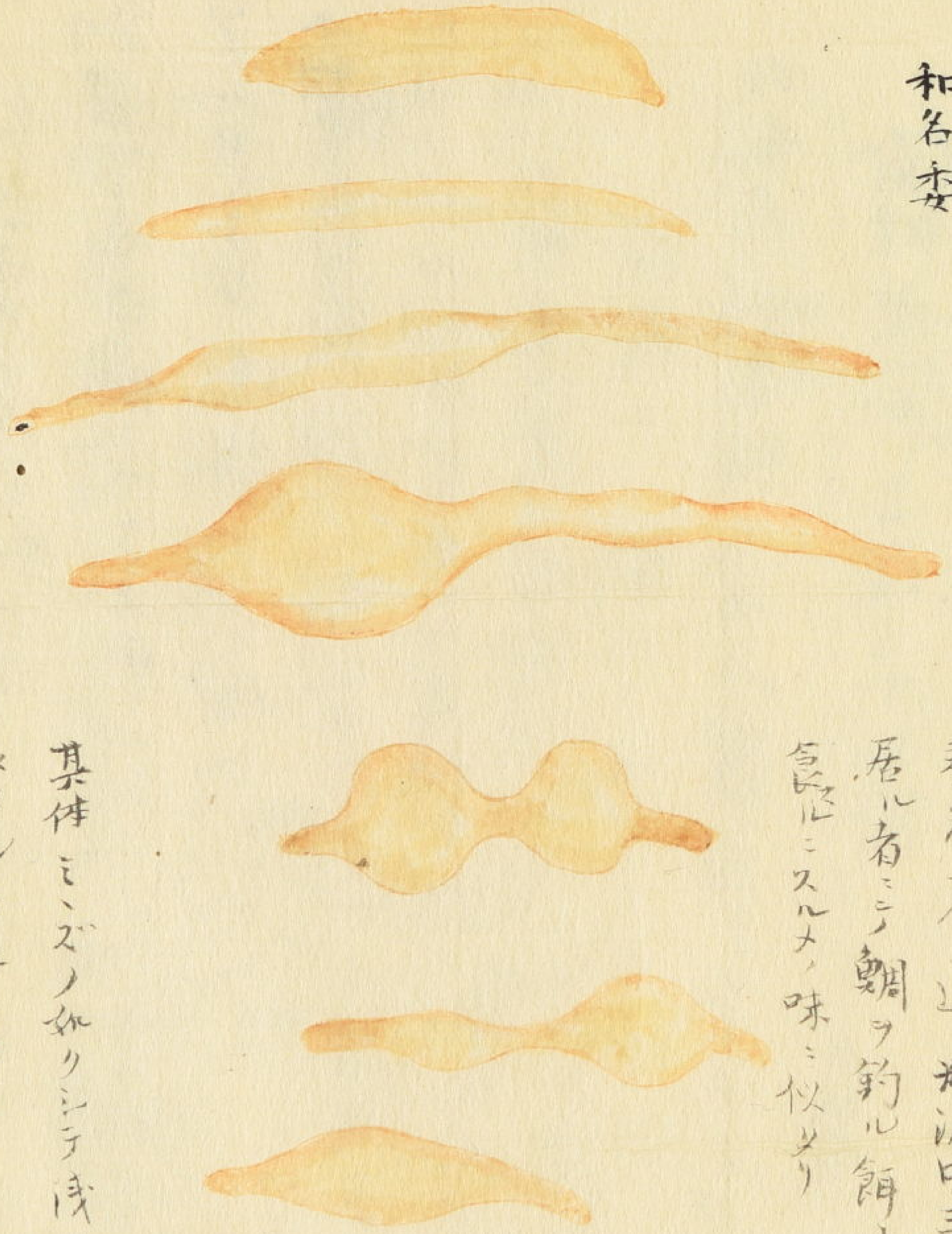
漢土知我間韓従韓 韓称我曰委陀

称新羅称綿積 綿和陀本音相通又称海曰和多

海宮即任那 和多宮也

和名抄

蝙蠚 和名委(ヰ)



明治十六年五月大森村ノ漁夫之ヲ田中穎庵君ニ送ル海泥中三尺ハカリノ下ニ居ル者ニテ鯛ヲ釣ル餌トス是ヲ蒸テ食ヘハスルメノ味ニ似タリ

其体ミヽズノ如クシテ浅紅黄常ニ体ヲ変シ奇体ノ者ナリ

出雲のふ大和のふ

和訓栞一十三平假字を出雲のふといひ片假字を大和のふとよふハ其字を造れる國を称するものなり

○本朝書籍目録ニも肥人書五巻と見ゆ今其傳をしらす松下氏の説ニ今西國の人文字の異体を謂て肥後字をふと云をいへれハ弘法より以前ニ假字の字体ハありしなるへし

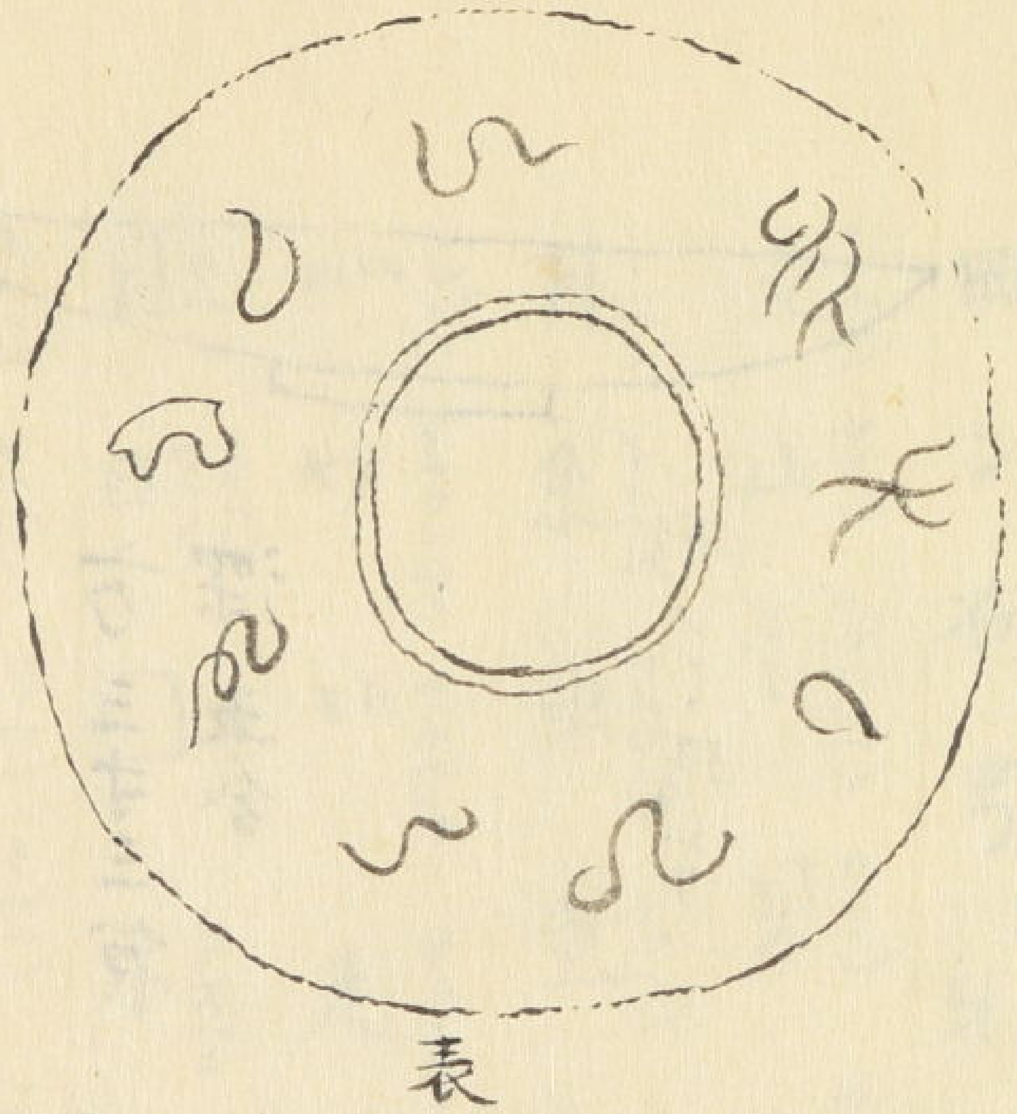
開知新聞　三百三十四號　大賀眞浦

北海道沙流郡ノ土人熊送りをなすを以て楽とス
熊送とハ深山ニ入りて穴熊の子なとを生捕りなして之れを生長の後拳をなし土人数十人集りて矢をもて射殺すなり

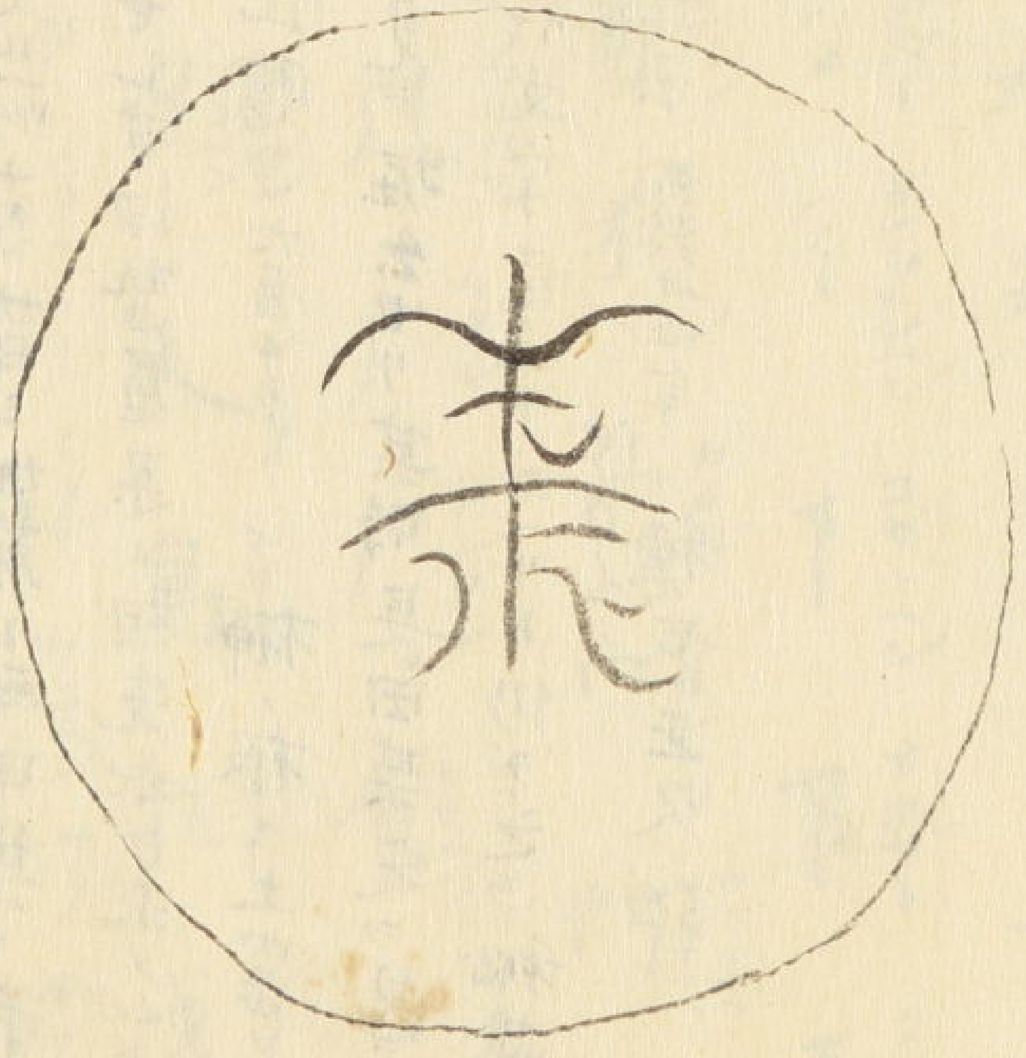
問その時何と言ひて熊を送るや曰熊によ能ク聞け汝ハ山神より貰受たるなり故ニ汝の皮肉ハ此土ニ留め汝の魂ハ今山神の許へ行くるなりて自今山神の仰ニ随ひ

てピリカ（美）處へ行ケ必ずに頭く魄留りて
人に害をなすといひて送るなり土人の死する
時ハ何と云て葬るや曰くワッカカモイ（水神）アベ
カモイ（火神）今この死し去の魂をピリカ處へ
送り下サレ私恵し下サレ チップカモイ（日神）へ此
譯を宜く申て下サレと云て祈り 死人に向てハ
汝ハ今死たるに依て汝の所有物寶物も鍋も
釜も家も皆汝に持せてやるから此土のことを
思ふな ピリカ處へ行て不自由なく居よといひて
家屋家具一切を焼捨而て葬送をするなり
問ふ親が死ねバ子が唱へごとをするか曰く
オヤジ（酋長）のエゾ錦を着て唱ふるなりと答たり

裏



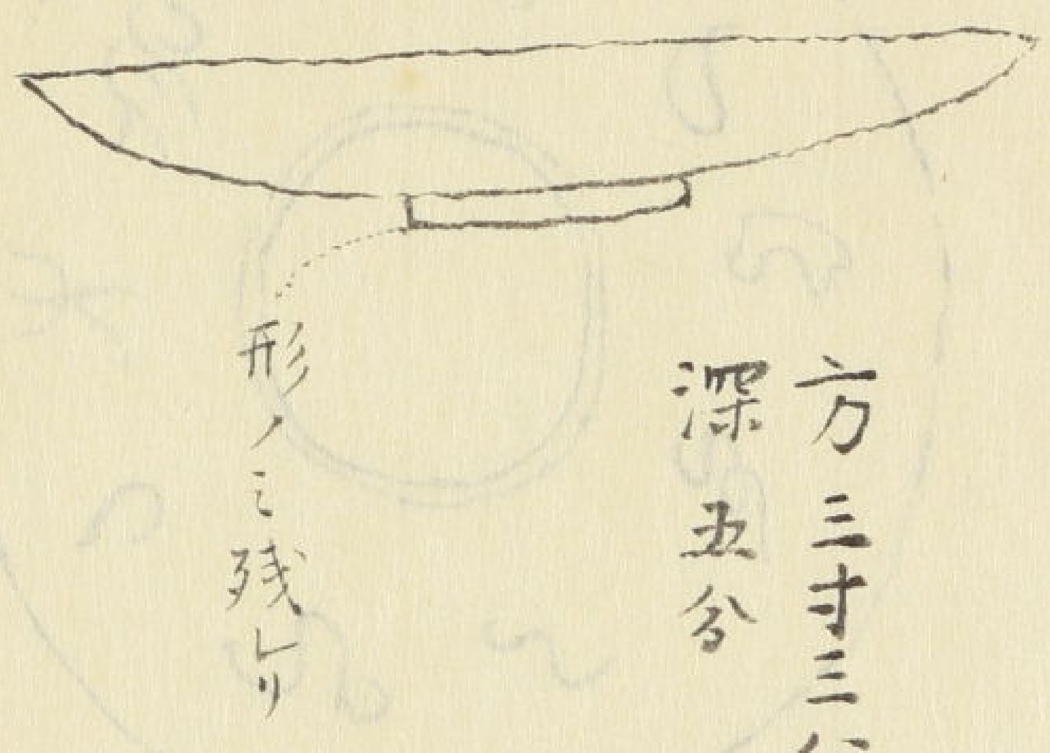
表



文字平面ヨリ高ク刻出シタリ

秦 日文傳所錄 秦ニ作ル

天ノ神ノ字ナリ



方三寸三分
深五分

肥後合志郡大津町伊勢屋某藏
スル所ナリ昔シ加藤小西甲佐山ニ對陣
セシ寸伊勢屋某ノ祖先水ヲ求メムトシテ
山腹ヲ穿チタリシニ榊ノ根ニ土器ノアルヲ
見テ堀出セリ其時長田某之ヲ見テ神
代文字ナラムト云ヘリト仍テ之ヲ秘藏セリ
ト云 明治十五年 肥後人
穗足正久記

伴信友手録 中里ノ千族ヨリ借写ス

田 メヘン　冫 ニスイ　石 イシヘン　弓 ユミヘン　牛 ウシヘン　木 キヘン　禾 ノギヘン　手 テヘン　亻 ニンベン　言 コトバヘン ゴンベン　金 カネヘン

至 イタルヘン　山 ヤマヘン　忄 リツシンベン　貝 カヒヘン　氵 サンズイ　彳 ギヤウニンベン　阝 コザトヘン　阝 オホザト　王 タマヘン

耳 ミミヘン　糸 イトヘン　車 クルマヘン　立 タツヘン　馬 ウマヘン　犭 ケモノヘン　冖 カムリ　宀 ウカンムリ　門 カドガマヘ モンガマヘ　辶 シンニウ シンニヨウ

灬 レンガハ　竹 タケカンムリ　艹 サウカウ　走 サウニウ　几 カザガマヘ　广 マダレ　厂 ガンダレ　食 シヨクヘン ジキヘン　口 クチヘン　夊 ハツカフリ

月 ツキヘン　日 ニチヘン ヒヘン　冂 ツツガマヘ　示 シメスヘン　足 アシヘン アトヘン　廴 エンニフ　鳥 トリヘン　隹 フルトリ　戈 ホコ　目 メヘン

方 カタヘン　身 ミヘン　其 ソノヘン　巾 キンヘン　殳 ルマタ　酉 ヒヨミノトリ　木 ヒラギ　女 ヲンナヘン　皿 サラ　刂 タツワケウ　頁 オホガヒ

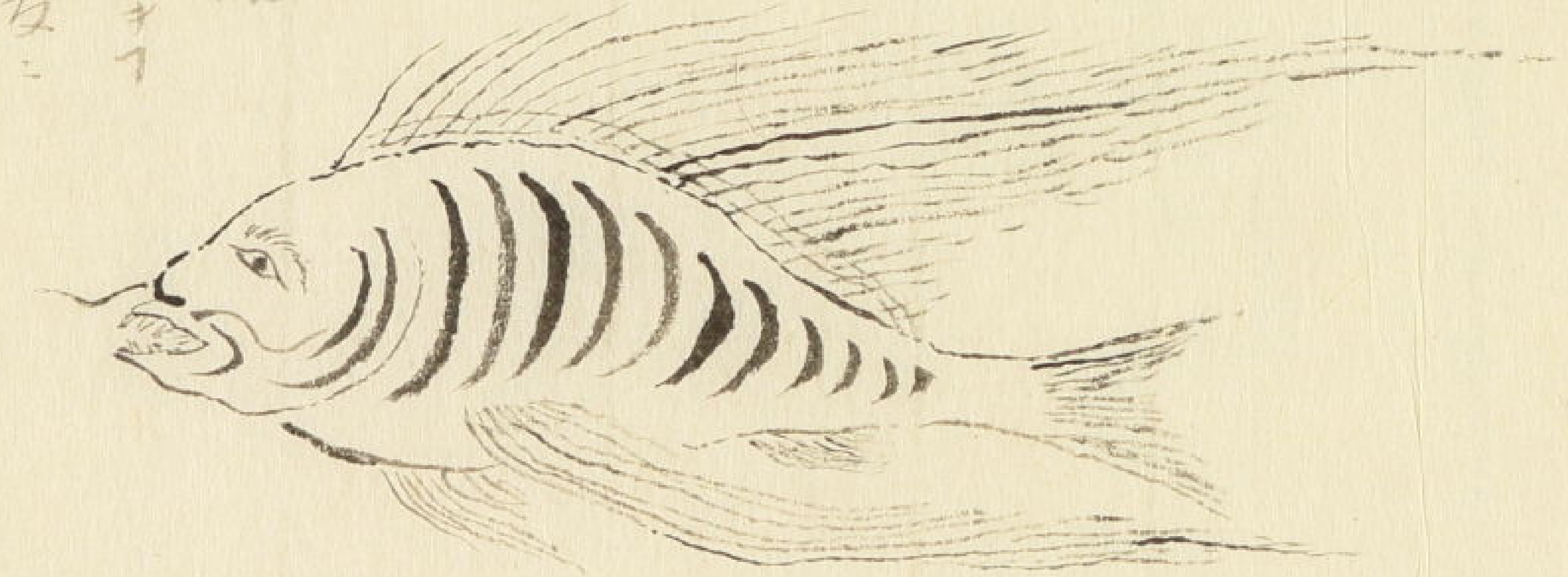
人 ヒトカンムリ　火 ヒヘン　子 コヘン　疒 ヤマヒダレ　尸 シカバネ　八 ハツテン　丶 テン　七 タスキ　土 ドヘン ツチヘン　彡 カミカザリ　虫 ムシヘン

豆 マメヘン　米 コメヘン ヨネヘン　雨 アマカンムリ　爿 シヤウヘン　魚 ウヲヘン　角 カクヘン　里 サトヘン　舌 シタヘン　牙 キバヘン　束 ツカネ　言 シヨヘン　舟 フネヘン

怪児

明治十九年三月廿一日朝野新聞云 山形縣羽前國東置賜郡
大塚村井澤慶助ノ長女セイハ美人にして主なき種を身に
宿し先月七ヶ月にして生落したるは図の如き怪児なり毛髪は
銅色を帯ひ縮れて渦を巻き三個の眼球あり鼻より口に
かけ長く尖りたるは烏天狗の嘴に似たり手足の甲と指は鳥
類の如く指の間に水掻に似よるものあり胸部より腹部に
かけ一面に白毛を生にし

朝陽日報二百三十九号
明治十六年五月四日
播广國揖西郡岩
見港森川平右エ門
客月 奇魚ヲ得タリ
形ハ子ブトザコの如く
身長三寸許腹ノ
巾一寸許眼目眉毛
人ニ異ナラズ口髯ハ鯰
ノ如シ鰭ノ全身ヨリ長キコ
一寸五分ニシテ人ノ毛髪ニ
異ナラズ 兵庫縣ニ差出シ外國人等ニ示スニ
皆珍奇トスルノミ 神戸新報ニ載テ識者ニ問フモ誰モ答ルナシ

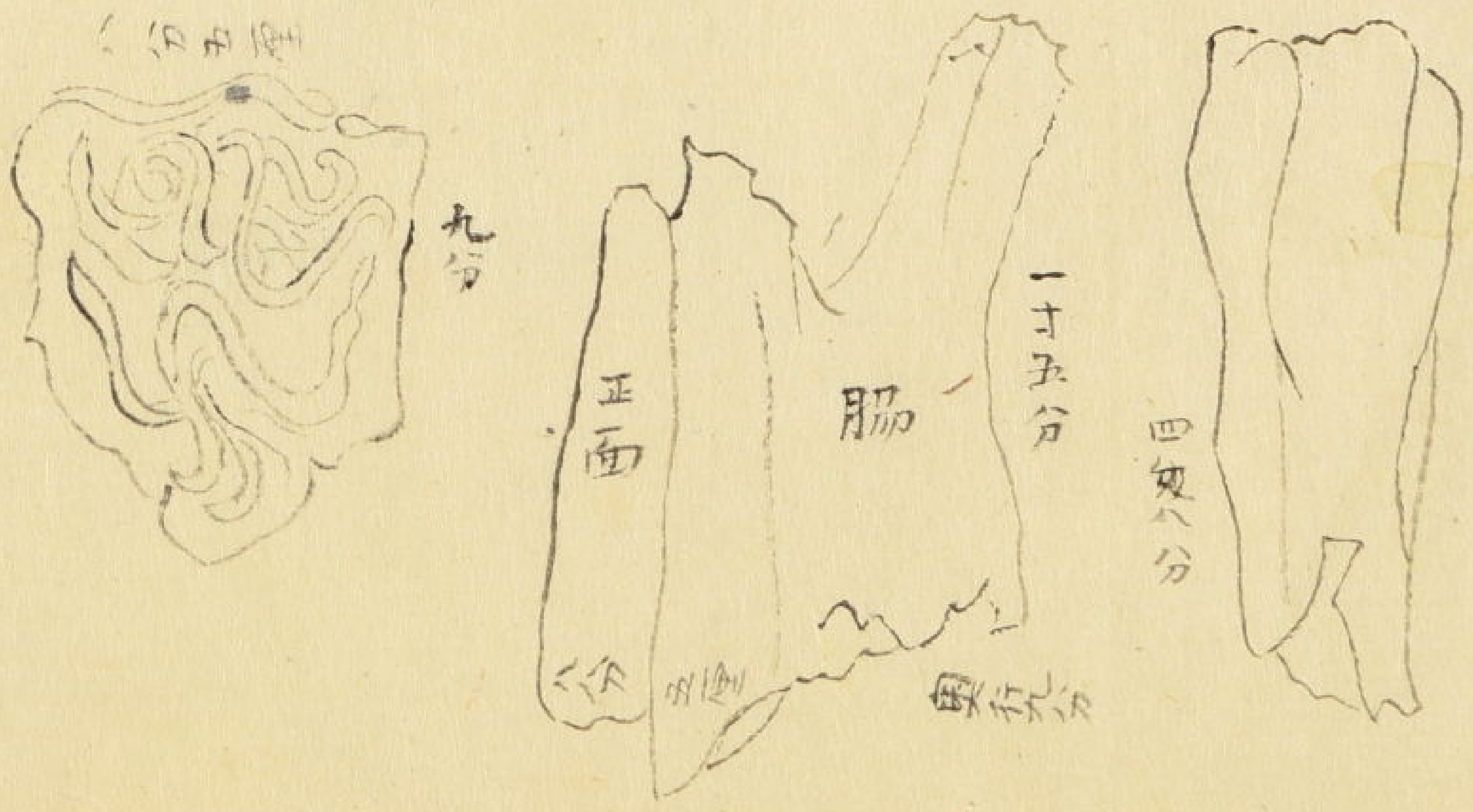


明治十七年四月七日朝陽新報ヨリ抄略ス又
市邊押歯白王子御歯
近江蒲生郡古保志塚村
鬼ガ塚東五六間許ニ山
陵アリ石棺ノ形現出ナリ
文政四年御歯ト御骨トヲ
掘出セリ

十二代景行帝子
日本武尊
丈一丈

十四代
仲哀帝
同一丈

十九代
反正帝
古事記
九尺二寸五分
御歯一寸



八四六三八四七四七一世十三廿
四二八一四七三七八世九廿
二一九〇七八六三四
六五四五三四八六二世八廿

位	一	十	百	千	万	十	百	千	億
世七廿	八	二	七	七	一	二	四	三	一
世六廿	四	六	八	八	〇	一	七	六	
世五廿	二	三	四	四	五	五	三	三	
世四廿	六	一	二	七	七	七	六	一	
世三廿	八	〇	六	八	八	三	八		
世二廿	四	〇	三	四	九	一	四		
世一廿	二	五	一	七	九	〇	二		
世十二	六	七	五	八	四	〇	一		
世九十	八	八	二	四	二	五			
世八十	四	四	一	二	六	二			
世七十	二	七	〇	一	三	一			
世六十	六	三	五	五	六				
世五十	八	六	七	二	三				
世四十	四	八	三	六	一				
世三十	二	九	一	八					
世二十	六	九	〇	四					
世一十	八	四	〇	二					
世十	四	二	〇	一					
世九	二	一	五						
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]						

ニ及テ廿七代ヽ兆殿ス良主

一億三千四百二十一万七千
如此推シ上レハ廿七世ノ
一身ニ二人ノ父母アリ二人ニ

十二代景行帝子
日本武尊
化一丈

十四代
仲哀帝
同一丈

十九代
反正帝
古事記
九尺二寸五分
御歯一寸

明治十七年四月七日朝陽新報ヨリ抄写ス
市邉押磐皇子御遺

近江蒲生郡古保志塚村
鬼ガ塚東五六間許ニ山
陵アリ石棺ノ形現出セリ
文政四年御歯ト御骨トヲ
堀出セリ

上之前下
歯皮多腐

一寸五分五厘
正面

同正面

奥歯

一寸五分
正面

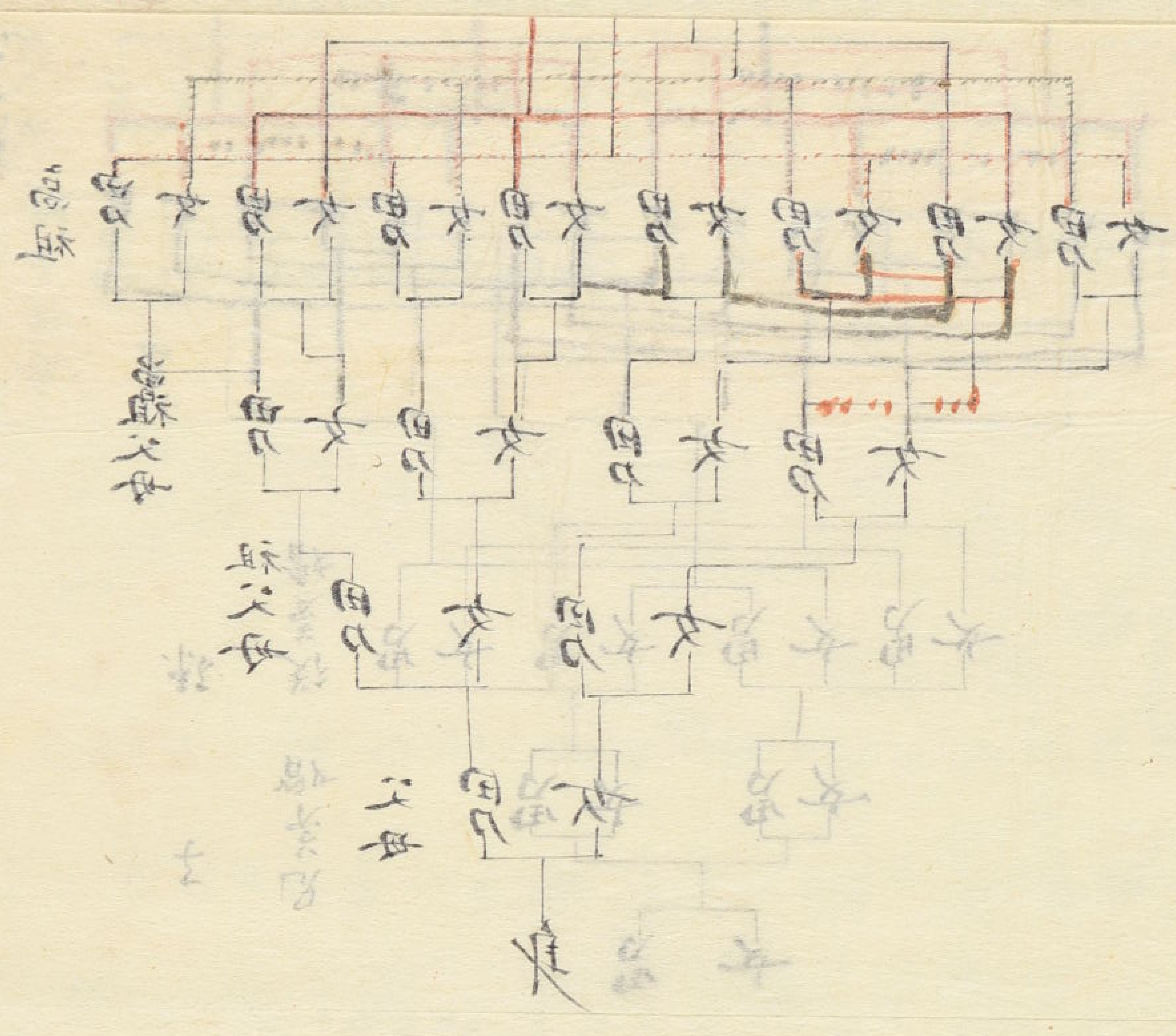
同中之合

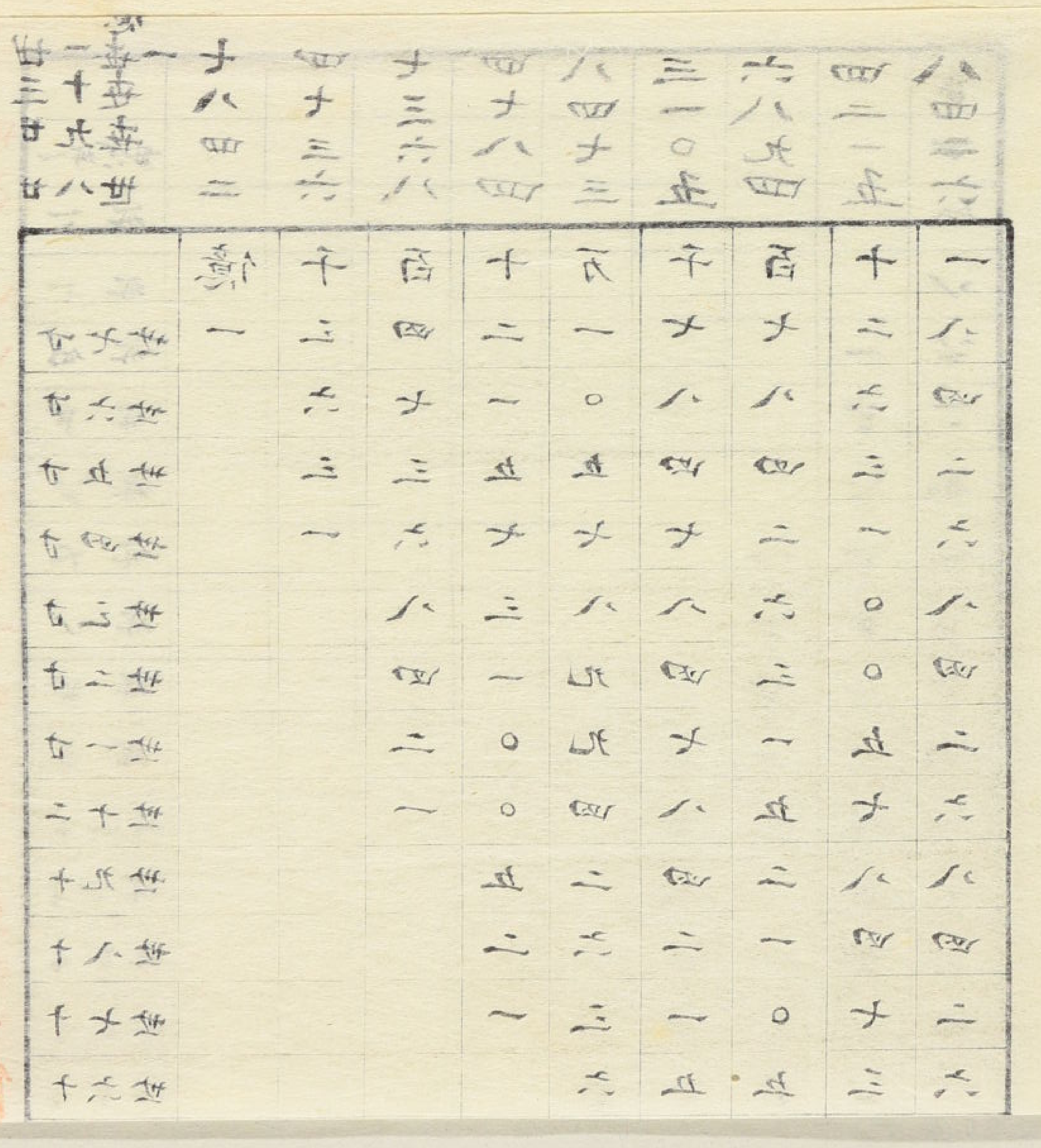
九分

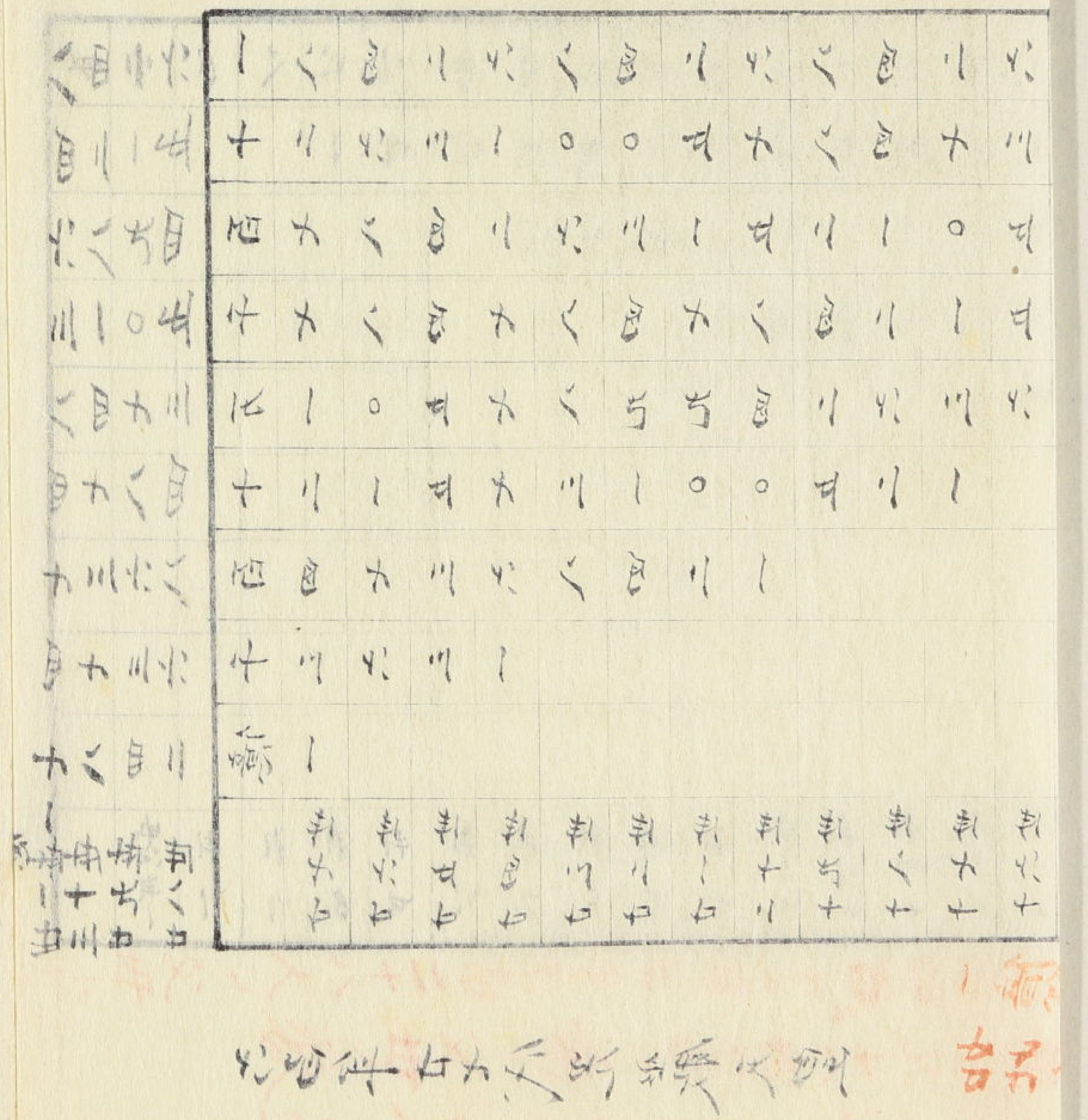
六百年廿七代光嚴天皇

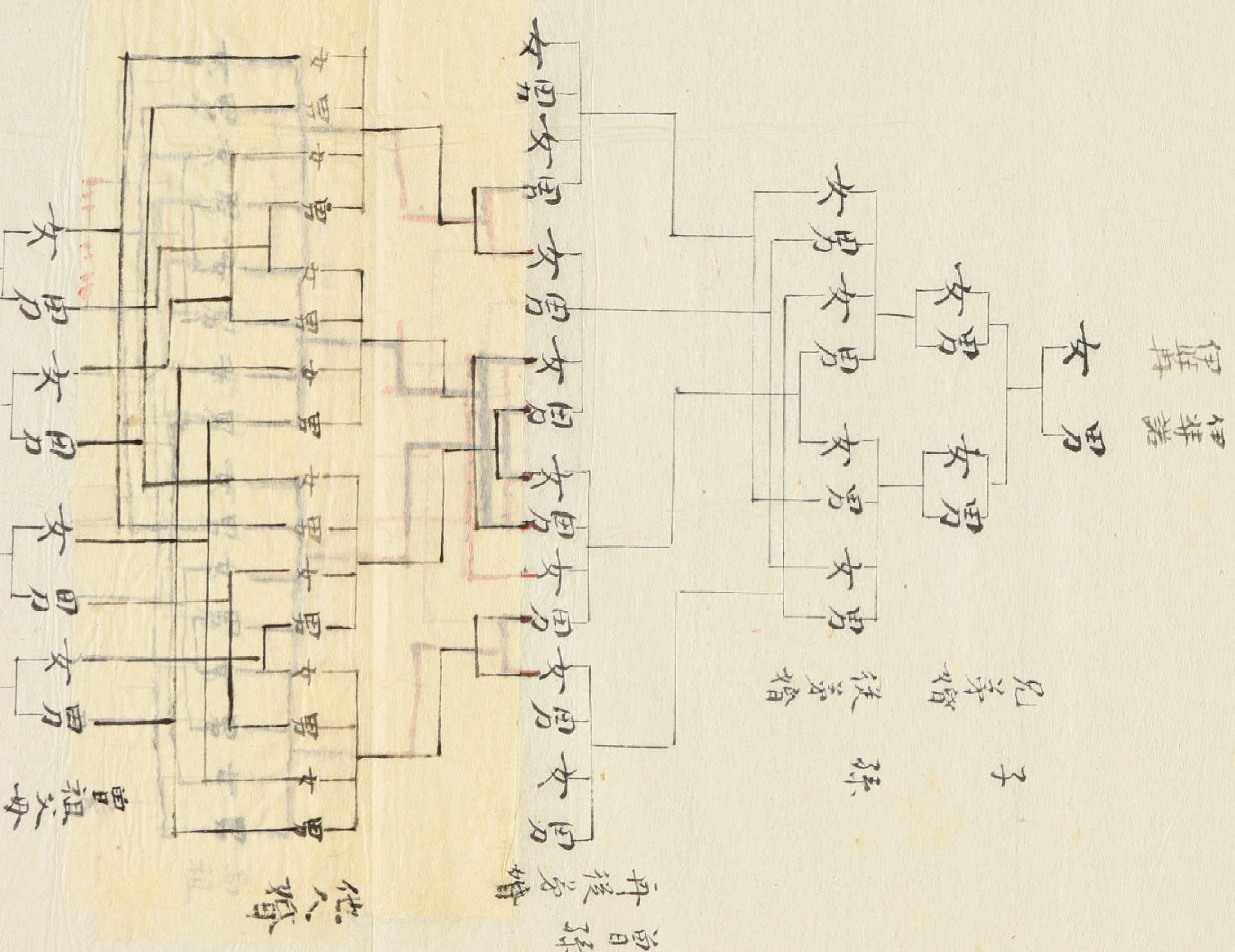
	億位	億	千	百	十	万	千	百	十	一
卅一世	一	七	四	七	四	八	三	六	四	八
三十世		八	七	三	七	四	一	八	二	四
廿九世		四	三	六	八	七	〇	九	一	二
廿八世		二	六	八	四	三	五	四	五	六
廿七世		一	三	四	二	一	七	七	二	八
廿六世			六	七	一	〇	八	八	六	四
廿五世			三	三	五	五	四	四	三	二
廿四世			一	六	七	七	七	二	一	六
廿三世				八	三	八	八	六	〇	八
廿二世				四	一	九	四	三	〇	四
廿一世				二	〇	九	七	一	五	二
二十世				一	〇	四	八	五	七	六
十九世					五	二	四	二	八	八
十八世					二	六	二	一	四	四
十七世					一	三	一	〇	七	二
十六世						六	五	五	三	六
十五世						三	二	七	六	八
十四世						一	六	三	八	四
十三世							八	一	九	二
十二世							四	〇	九	六
十一世							二	〇	四	八
十世							一	〇	二	四
九世								五	一	二
八世								二	五	六
七世								一	二	八
六世									六	四
五世									三	二
四世									一	六
三世										八
二世										四
一世父母										二
										身

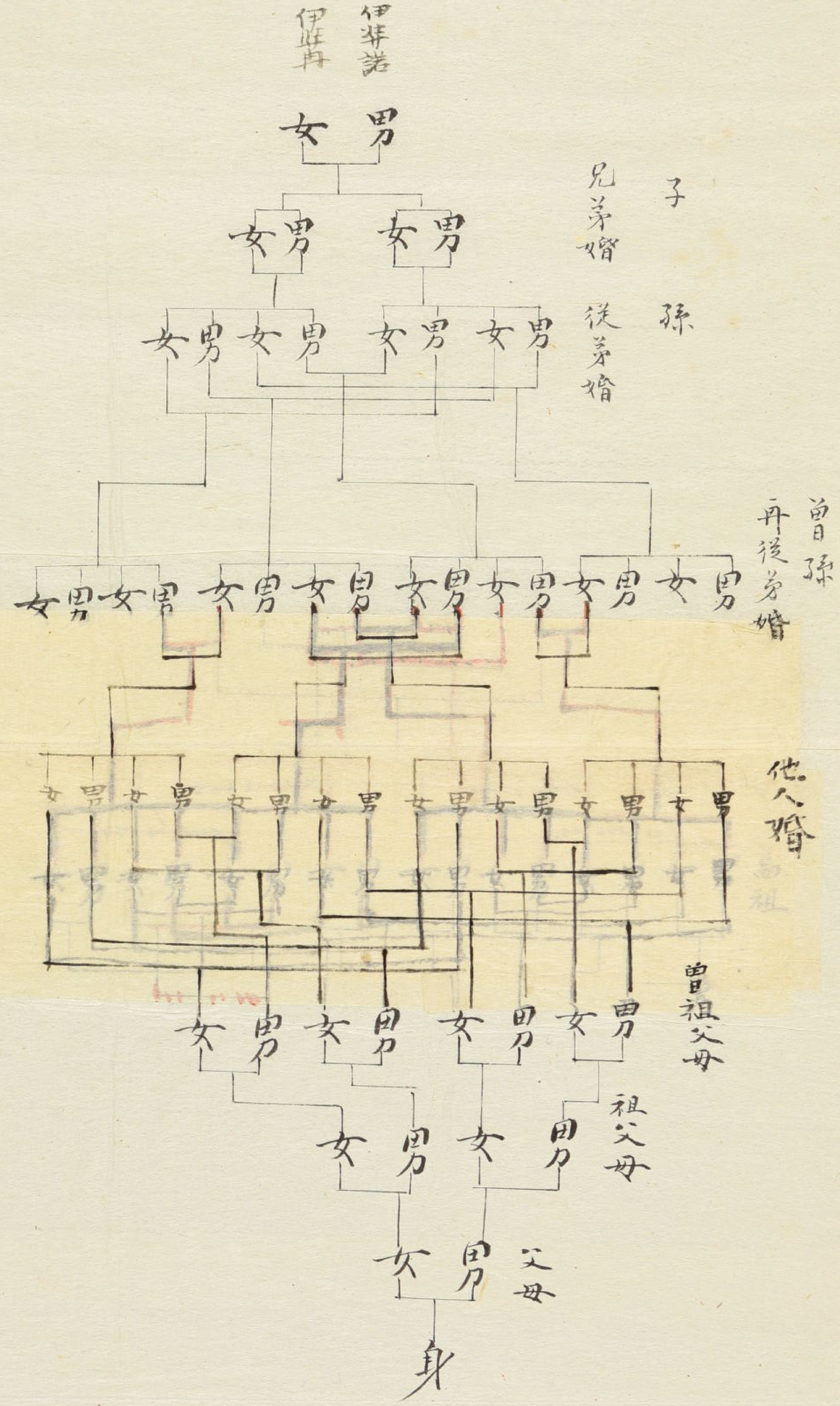
一身ニ二人ノ父母アリ二人ノ父母ニ四人ノ父母アリ
如此推シ上レハ廿七世ノ前ノ父母ノ数
一億三千四百二十一万七千七百二十八人ノ父母ト十

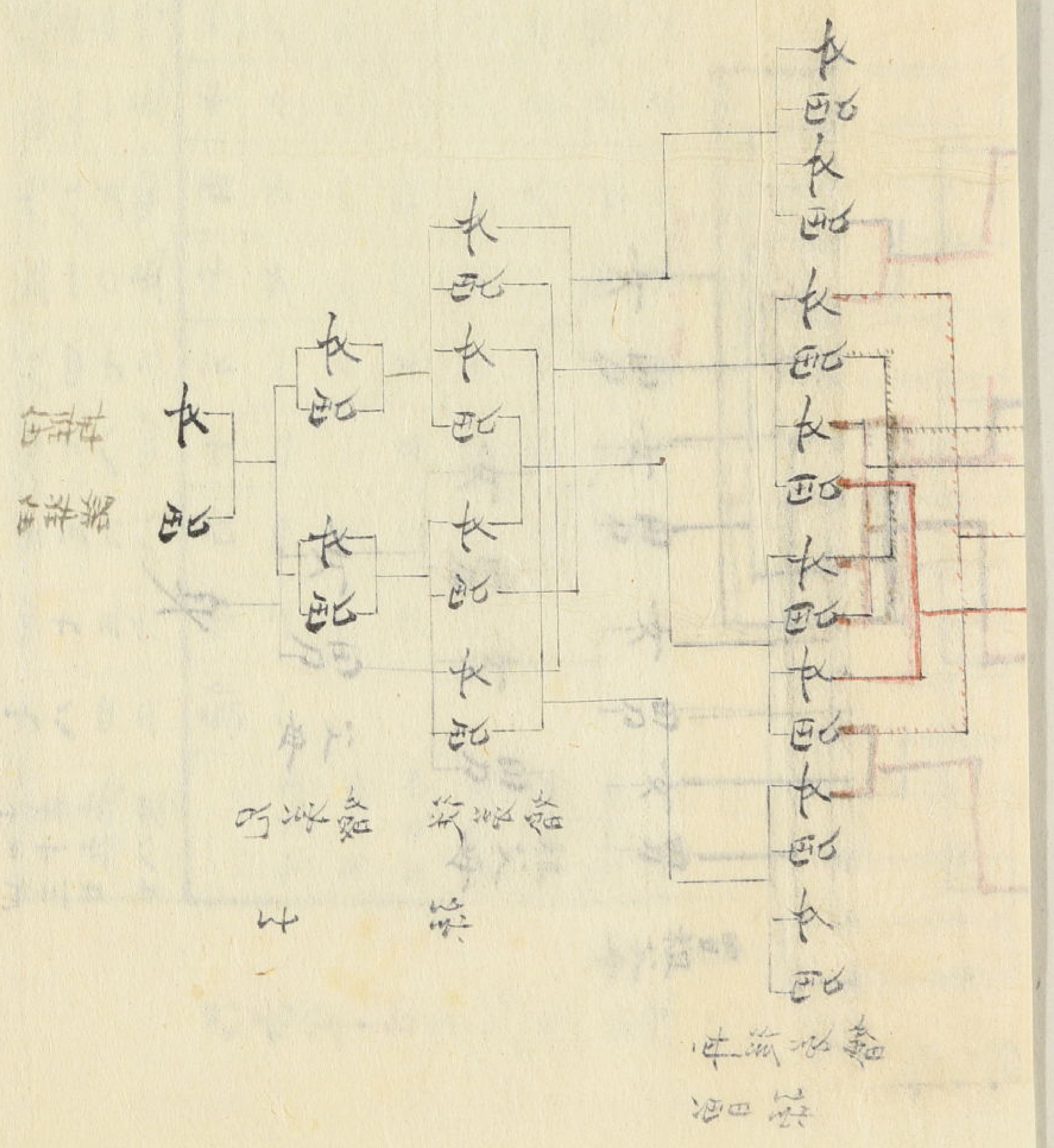







伊弉諾
伊弉冉
子
孫
曽祖父母


伊弉諾
伊弉冉
男 女
子
兄弟婿
孫
従弟婿
曽孫
再従弟婿
他人婿
曽祖父母
祖父母
父母
身



伊夜彦神社々家所傳祝詞三章寫

信友云初章モトヨリ題ナシ
假字モ本ノコトシ左ニ朱モテ
ツケタルハ信友カクワサナリ

天皇我大命乎以旦申久佐御代者常盤尓堅盤尓護玉倍登
禮代物乎置座高取南延天伊夜彦大宮尓坐須天香兒
山命乃宇都乃御前尓宣擧旦年恐美惶美毛申須

小祭詞

掛毛畏幾伊夜彦大宮尓坐須天香兒山命妻戸大宮尓坐須
女神此二神大御前尓某ヒ乎祈意申須御子乃世継三竹立山
尓坐武呉大神福井尓坐須舟山大神美登乃山尓坐須草奈
岐大神比曽尓坐今山大神勝音尓坐須倶留大神美都
垣内椎樹本尓坐乙子大神此皇神等乃御前戸内乃神職
我齋祭十六神遠都神乃美伊豆太ヒ志久國乃栄乎夜守晝
護尓護賜倍登申

比ヒ良之詞

神佐祢伊豆万幣職八十継支家續久産子等賀寿言申佐大
神乃阿奈南美賜布麼迩ヒヒ眞霧布氣朝久良氣乃國登宜
比擧之祢彦山乃常津盤根尓宮柱布登數立旦高天原尓千
木高志理天天乃栄屋地乃栄乎守坐登八平手乎八陜乃隅
路尓弖響之天祈祝幾申寸音乎登遠ヒ迩聞之食宇都乃大神

右祝詞三章は越後国蒲原郡伊夜日子神社社家高橋図書
宇都宮戸祭(トノマツリ)村高橋光則ぬし等が家に古く傳はれるをうつさせ之
二荒山神社の事は南朝の末つかたの世の騒かしさに衰へて神宝散せし
ことどもありけるにあはせて社伝旧記なども失ひたることありとぞいへ
伝ふそのうへ天文十九年に荒山の内荒山を二荒罷田和泉守と
いふ武士城を構へて在りけるを同廿一年に上杉家より軍を起して
攻めより山崎宮内といふものを先として乱入させけると此宮内権威
を恐れて神社の旧記證文なとを奪ひ其社のものらひをさまし
譲り神宝をもうつしなどしけるゆゑに旧記ども多く失はれぬ

こは当社も度々焼失しけれは遺りけるし古文書も纔に
のこれる中に荒山城は上杉景勝を守護す 将監の時梶原ち焼かれたり 件の三章の祝詞は
二荒山別当家にいとふるく伝はりけるをとりあつめて写
したるなりこを其家に比々良祠とぞいへる図書が中世のたやすく
比々良と云ふものありて慶長二年の比まて大宮司仕奉
れり 此比々良神社の衰を哀れて 何くれと思ひつくせりと云ふ さて此館子御火焼(ミヒタキ)祝詞
とふの先例の家に遺りしをいくたびたるが写し出たるし
破れあとも文字も詳ならぬ所もあれは文政三年三月図
書の件の三章をうつし写したるを又出そへおこせたる
趣なり

又宗彦が家に文明九年讃岐の藤原兼久が写しおける旧代文
字といへるものの文四社の所蔵行なりしと云ふ事古きに書きし太平記
と題したるがありて中に亀甲一枚綴りつけたるを副へ文字
一面ありそを共にうつしたるをたりそいふを写しおきぬ

文政三庚辰年二月廿八日　伴信友

下野宇都宮中里千頴の本を借りて写しぬ

明治十九年五月　正臣

太平記作者

明治十九年十二月十五日郵便報知新聞ニ重野安繹ノ演説ヲ載テ云
洞院公定公ノ日記ニ応安七年五月ノ記ニ曰五月三日伝聞去廿
八九日間小島法師円寂（円寂トハ死去ノ事ヲ云）是近日翫天下
太平記之作者也凡無為卑賤之器有名匠聞無謂念

日本古碑ニ支那年号ヲ用ル

明治二十一年三月十八日伊豫松山人藤野正啓ノ墓誌銘ヲ支那
公使黎庶昌石ニ彫シ撥興セシニ光緒十四年二月之トアリ
シニ付尋問セシ処外国ノ碑ヲ書スルニハ我年号ヲ用来リシ
古例ナルヨシ語リケルシ見レハ吾日本ニ古碑支那年号アルハ
支那人筆ナルヘシ

明治廿一年三月　三橋[illegible]識

神武天皇ヨリ史官アリ

弘仁私記序ニ自伊奘諾尊至彦瀲尊史官不備歳次
無記云云トアルニ由レハ神武帝ニ至テ始テ史官アリ歳次ヲ
記セル由ナリ

周武王八十一歳ニシテ成王ヲ生ム
周武王九十三ニテ崩スナレハ此時成王十三歳ナリトイヘハ成王ハ
武王八十一歳ノ子ナリ

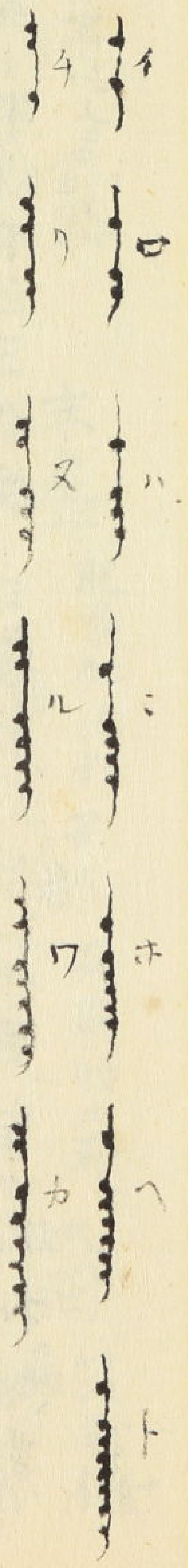
○

天文図解云　春秋経ニ載スル日蝕三十七事　或ハ朔ヲ失シ或ハ閏月ヲ
失フ

結縄

宮地嘉六云　土佐ニテ古一ノ結縄法アリ　イロハニ因テ之ヲ
為ス言法ノ通セサルナシ

㊀ イロハニホヘト　㊁ チリヌルヲワカ　㊂ ヨタレソツネナ
㊃ ラムウヰノオク　㊄ ヤマケフコエテ　㊅ アサキユメミシ
㊆ ヱヒモセス



以下之ニ準フヘシ

刻木縄法

北史　唐李延寿撰　巻九十四列伝第八十二　倭国
無文字唯刻木結縄敬仏法於百済求得仏経始有
文字ヲ知ル卜筮ニ尤信ス巫覡ニ云云
隋書同文
文字ナシトイヒアリトイフハ漢字ヲ指スナリ其前刻木ノ法アリ
我古字ヲ刻スルナリ　結縄ノ法モ又文字ニ数フ

北史　新羅百済皆以倭為大国多珍物並仰之恒通使往来ス
（隋書ニ仰ノ上ニ敬字アリ　巻八十一列伝倭国）

皇明世法録巻七十九　史官陳仁錫　許笛字　日本攷
其属国百五十餘　新羅百済莫非属国　皆以倭為大国多ニ珍物
恒通使往来ス云云

日出處天子

隋書巻八十一列傳　倭國

大業三年其王多利思比孤遣使朝貢云云其國書曰日出
處天子致書日沒處天子無恙云云帝覽之不悦謂鴻臚
卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞明年上遣文林郎裴
清使於倭國

歴朝釋氏資鑑巻第五　閲沙門懸仲集ニ同文ヲ載ス帝覽之甚悦
中京師遠等カ勘文引経籍後傳記　善隣国宝記見余　云　帝覽之不悦下ニ猶怪
其意氣高遠遣裴世清等十二人送国高表觀国風

三韓國字

異稱日本傳下之三今按ニ三韓有國有讀音崔世珍抄ニ編四聲
上下巻已言之

魏志

瀚海　玄界　末盧　肥前松浦郡　伊都　筑前怡土郡　奴國　筑前儺縣

不彌國　筑前宇瀰　投馬國　筑後郡名妻　邪馬臺國　大和國

一筑後上妻下妻三瀦三郡中一

斯馬國　志摩　已百支國　磐城　不呼國　不佐ノ誤カ總　下總

姐奴國　讃岐　對蘇國　土佐　蘇奴國　和名抄下總結城備前邑久　佐渡　呼邑國　近江

華奴蘇奴國　華加ノ誤　若狹　鬼國　紀　為吾　伊賀　鬼奴國　紀

邪馬國　山城山背　躬臣國　越口巴利國　尾張カ播ナカ　支惟國　紀國　山城郡ニ紀伊アリ

烏奴國　烏ハ美ノ誤カ美濃　伊勢郡安濃カ　奴國　武藏野カ野カ信濃カ

和名抄陸奥　會津耶麻　和名抄陸奥大沼

狗奴國　毛野　齊明紀飽田渟代二郡トアル渟代カ

魏志此女王境界所盡四ト　和名抄秋田　和銅五年一割陸奥越後置出羽國

の列都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚
爾支ハ主ナルベシ即縣主

至ニ對馬國ニ其大官曰卑狗副曰卑奴母離
卑狗ハ彦 景行紀十八年春三月天皇巡狩筑紫國始到夷守
兄夷守弟夷守ノ名モ見エタリ元職名ナル(シ)後ニ人名地名トナル
此亦武臣部曰筑前國驛馬夷守十五疋
垂仁紀二年ノ一云意富加羅國王之子都怒我阿羅斯等云云到穴
門時其國有人名伊都々比古謂臣曰吾則是國王也除吾復無
二王故勿往他處然臣究見其為人必知非王也云云
是ヲ以テ古代西國ノ縣主等韓人ヲ欺テ我國王ナリナド云ヒシ
アリト見エタリ

本居子ハ古事記ニ偏頗シテ日本紀ヲ陳ムノ僻アリ日本紀ト云ヘハ年月日等モ
唯作物ノ如クニ云ハレタルヨリ以来紀記ヲ讀ム人ノ脳髄ニ深ク染シテ日本紀ヲ疑フ者
多シ然レ圧古事記ハ一ノ史料ニシテ漢史ヲ多ル一史料ニ過キズ日本紀ヲ捨テ
今此二典ヲ比較シテ論セハ古事記ハ成功ヲ遂ケザル書ニシテ日本紀ハ十ノ六九實ニ
何ニカ由ルヘキ 又日本紀ノ年月日悉ク作リ成スヘキナラハ能古代ノ實ヲ推スル世
古代ノ實ヲ推スル世ニ當リテ如此教多ノ

能ク之ヲ審セハ懸ル者ニ在リテハ盛カ實カノ疑ハアルヘシナナリ唯紀記ノ編纂成功ニ至ルマデ
数多ノ星霜ヲ経其間又数多ノ編纂者ニ係リ先人ノ私考ノ記ハ
後人ノ公説トナリ舊史ノ写誤ハ記紀ノ正文トナリ錯簡脱落其侭ニ依然トシテ
文ヲ成シ前後不合事実齟齬後人ヲシテ讀解セシメザル所ニ至レリ 疑團更ニ
然圧元来私意ヲ以テ作意セシモノニアラザレハ齟齬不合ハ却テ之ヲ訂正スルノ
一助トナリ舊史年代ノ真面ヲ窺フニ至レルハ更ニ言ナクトスヘシヤ
紀記ノ年月日ヲ實ナリトセバ文字ノ有無ヲ決セザルヘカラズ古代稗田阿礼ノ
如キ記臆アルニセヨ語部有テ古事ヲ語リ傳フルニセヨ神武帝以下幾年月
日口傳ヲ以テ傳ヘ得ヘキニアラズ之ニ由テ考フレハ漢字ナキ以前一
（如キ書記ナクシテ）
種ノ文字有リ記録アリシナラン
弘仁私記序ニ神武帝以前史官ナキ由ヲ記セルハ神武帝以後史
官有テ記録有リシ由ヲ云ヘルナリ
北史并隋書及倭國傳 無文字唯刻木結縄敬佛法於百濟求得佛経
始有文字 知卜筮尤信巫覡 コノ書ニ無文字有文字ト云ハ漢字ヲ指セルナリ刻木結縄ハ即我古字ナリ口

口上古筆墨ナシ故ニ木板ニ刻ム之ヲ刻木ト云ナリ 結縄ノ法今土佐國ニ傳ヘタリ
其法ヲ以テエルハ如何ナル言語ト雖写シ得ベキナリ

支那上古ノ結縄ノ如
何法カ今知ルヘカラス

續博物志 伍晉李石撰 倭辰全國或横書或左書或結縄或鍥木唯
高麗箕子寫韻法取正中華
上書ニ倭辰韓トハ辰韓即新羅余ハ狂奈即百濟ナリ三五堂
叙暮來ニ蓋高句驪文字之國也トモ有テ高句驪ハ上古ヨリ
漢字ヲ用井シナリト見エタリ然ルニ本邦及新羅百濟ハ結縄鍥木
構ノ文字ナシヲ用井テアリシト判然ナリ漢字ヲ用井サリシナリ
我邦古字ノ説ハ古代文字考ニ譲テ畧ス此所ニハ唯漢土ノ
説ヲ挙テ一証ニ備ヘルノミ

我邦漢字ヲ用ヒルハ百濟直支來朝ノ時ヨリ以テ始トス但シ
此以前ニモ漢土ノ住来アリシ時ニハ本邦人ニシテ漢字ヲ学ヒシ者モアルヘシ
彼邦人ニシテ我邦ニ来リシ者ハ漢字ヲ用テ事ヲ記セルモ有リシナルヘ
シ奈須国造碑ニ永昌ノ年号ヲ用井タリ（朱鳥ノ字ノ剥脱セシナラムト云
説モアレト石質堅牢ニシテ纔千歳ヲ経ルモ剥脱ノ憂ナキ也（朱鳥ノ誤）永昌ノ字ハ
明瞭ナリト云）永昌ハ東晉ノ元帝ノ年号ニシテ古事記ノ允恭帝五年

探題、講會有講師探題證義
是謂三職 探題掌探題
以設難
官班記所謂法道之淵源学道之
嶮難者假以為監督之称
分題、滄浪詩話古人ーー或各賦一物
或曰探題
嚴滄浪詩話謂詩有別才非
関学也トアレハ蓋明人ナラン

百濟ヨリ未得佛經始首文字アルハサルナルヘシ

日晷極短氣候極寒ノ時即チヲ以テ一年ノ境界トスルモ亦思惟スヘキ所ナルヘシ

漢字傳来以後漢字ヲ以テ歴史ヲ編纂スル時代ニ至テ漸
漢韓ノ暦模傳ヘ中ニ東土ニ漢土ノ暦法ヲ傳ヘ之ヲ斟酌シテ
大小ノ數ヲ設ケテ古代ノ年月日ヲ推歩シ干支ヲ配當シ以テ紀年ヲ定メタルヘシ
先ツ年紀ヲ推歩シ次ニ干支ヲ配當シ干支紀年ヲ作リトシ（古事記ハ伊吉連博徳書
タレドモ猶數字紀日ヲ用ヰズ 古事記崇神帝戊寅年十二月崩ノ類 伊吉連博徳書
己未年七月三日等ノ如シ 紀日ヲ推歩シテ干支ヲ配當スルハ難キ

術ナレバサモアルベシ 其後百済本紀等ノ体ニ準ヒ数日紀日ニ干支ヲ配当シテ数字ト干支トヲ並用セシ（百済本紀 三月十二日辛酉四月一日庚午ナドト見エ 孝徳紀或本云十一月甲午三十日トアリ）按ニ此本ハ古事記（旧史）編纂ノ後日本紀（古事記）編纂ノ前ニ成リシ書ナルベシ（但シ古事記ハ旧史ノ干支紀年ヲ載セタリ）日本紀ヲ編纂スルニ当テ始テ旧史ノ数字紀日ヲ廃シ干支紀日ニ改メ月朔ノ干支ヲ記載セテ一月中惣テノ干支紀日ヲ推歩シテ知ラルヽコトセリ（四年春二月甲辰朔丁巳ノ類）是ハ旧史数字紀日ニ文写誤等ヲ生スルヲ禦グルノ注意ナルベシ 又此時旧史ノ干支紀年（辛酉年庚午年ノ類）ヲ廃シテ数字紀年トセリ（三年四年ノ類）是ハ干支紀年ニテハ~~本年干支一巡スル~~六十一年毎ニ同干支有テ混乱スルコアルヲ（混乱ヲ禦グ）訂正ノ注意ナルベシ 唯元年ニ大歳辛酉等ノ干支ヲ載テ推歩スレハ（一代中ノ某年）其年モ知ラルヽ如クセリ 此等ノ注意ノ可否ハ暫ク置キ旧史ハ干支紀年数字紀日ヲ以テ記セルモノナルヲ日本紀ガ根本ニ改メテ支紀年ヲ廃シ改テ数字紀年トナシ 故ニ錯乱セシ干支紀年ヲ数字紀年ニ対照シテ挿入セシ（故ニ錯簡トナリ［illegible］）数百年ノ差誤ヲ生セシモアリ去レバ

錯簡トハ知ラズシテ本文トシ他事ニ文脈ヲ連続セシメシモアリ是等ノ数紀記中ノ困難ニシテ見分ケ難キ所ナリ 若シ事実ト年代ト不合ノ疑ヒアル所アラバ数字紀年ニシテ干支紀年ニ改復シテ旧史紀年ヲ襲史等ニ対照スルナハ其錯簡誤謬ヲ思フニ氷解スルニ至ルベシ

今古事記ノ紀年ニ由テ日日ヲ推スナハ日本紀ノ干支紀日ハ悉ク水泡ニ属スナリ（古事記ニ由テ）後世史ヲ編纂スル者アラバ（ご存）数字紀日ニ改ムベシ

皇和通暦云 持統天皇朔旦至神武天皇歳月干支昭然可見而推諸異邦諸暦率多牴牾代暦山宗神天皇時遠荒不奉正朔遺六師討之載古朝文則知吾邦神聖開基自古若天校氏之称焉世多――云云

日聰古暦

漢土ノ暦法ヲ取用井レヨリ鉄木史時代ノ数字紀日ヲ一ニ推歩シテ干支紀日ニ改メタル時ニ残分ガ適当セザリシモアルベケレド大ナル差誤ハ無ルベシ

此書説ニ古来正朔ノ書ルハ古訓ニハノリト訓メリ 鉄木史ノ譜何如術ナリシヤ知ルベカラズ（ト難ズ）漢字ニ翻訳ナルナシテ正朔ノ字ヲ填メタルハ当ルヤ否知ルベカラズ 神武帝ヨリ持統帝ニ至ル一千［illegible］憲ヲ更ムル三 神武帝東征甲寅ヨリ仁徳帝十年壬午ニ至ル一法 十一年癸未ヨリ皇極帝元年壬寅ニ至ル一法トアルニヨレバ推古帝ノ時百済ヨリ伝ヘシ暦法ニ由テ皇極帝ノ世ニ神武帝マデ年紀月日ヲ推歩シテ干支ヲ配当セシモノナルベシ

仁徳帝十年（前ト後ト二法ヲ用ヰ）暦法ノ替ルモノハ推歩者ノ意ニ［illegible］ナルベシ 今知ル能ハズ（上法ヲアリ）

鉄木時代ノ年月日ヲ推歩シ更ニ後世ノ暦法ヲ附会シ閏月氣朔ヲ合セタルハ拙テ却ガ信スル能ハザル所ナリ